
魔法少女は俺がやるっ！

秋兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女は俺がやるつ！

【Zコード】

Z8741L

【作者名】

秋兎

【あらすじ】

つまらない日常にうんざりしていた不良少年の主人公は、ある日異世界へ飛ばされる。そこには一人のポニーテール魔法少女が立っていた。「あなたは、魔法少女になつたの」そう告げられた彼がおそるおそる自分の姿を見てみると、なんと女体化してしまっているではないか！必死に元の世界へ帰してくれと頼む彼に少女はある条件を出した。魔法と召還獣を使いこなす、最強系主人公＆最強系ヒロインの無敵タッグな異世界召還ものです。四石以降フルカラーの挿絵が全話に入っています

ナミダ、乾かして』 今回の挿絵

コメディ 8割 シリアス 2割

『不思議がるゆりなちゃん』

プロローグ

日常、それはとても退屈なものだった。

だが、それはとても幸福なものだった。

いつものような毎日が永遠に続くものだと思っていた。

+++

「……」

空に昇る巨大な赤い月を呆然と見上げる。

雲もないのにフワフワと舞い降りる赤い雪を払いのけ、

俺はひんやりとしたベンチから起き上がった。

「あー。悪いが、そこのチビ助。もう一度言つてくれないか」

はいた白い息は、すぐさま赤い世界に埋もれてしまつ。

田の前に佇む少女は、俺のため息に自分の吐息を重ねながら、
「よしよし」と呟いた。

「だ、だからね、」

決心したように彼女は笑顔で続ける。

「あなたは、魔法少女になつたの」

……。

我ながらバカな夢を見るものだ。

俺にそんな願望があつたなんてね。

はは、恐ろしい。

「笑えん[冗談だな」

ひらひらと手を振り再びベンチに横たわると、強引に田を閉じてやる。

これは悪い夢だ。そこに違いない。

現実世界に戻ろうとまどろむ俺の頬に冷たいモノが触れる。

「キ!!は、あつたかいんだね……」

+

+

+

幸せの壊れる瞬間なんて、あつけないものだつた。

シアワセ

。

それは、ガラスのよう^に透明で解りづらいモノ。

そして、ガラスのよう^に簡単に割れやすいモノ。

割れた破片はそれを越えようとする人をいとも簡単に傷つける。

体だけでなく心さえも、それは無残なまでに。

その破片に足を取られ、転んでしまわないよう。

何故なら起き上がるには耐え難い苦痛を伴つかう。

ああ……。

知らなかつたんだ。こんなにも幸せが脆いものだったなんて。

どうして、と笑う彼女を背に、俺は泣いていた。

この美しくも醜い世界をただただ呪うしかなかつた。

「もう行かなくちゃ」

少女は言った。

「いめんね

そう、悲しみを添えて。

第一石・シャクヤク異世界に立つ…！

「……へっへっ…」

寒い。寝返りをうちながら、俺は鼻をグシグシとこする。

今何時だ？

……いや。まあ、いいか。今日もこつものよつに遅刻して行こう。
むしろ、休んじまうか。面倒だし。

今更、不良の俺なんかが定時きつかりに学校へ行ったところで熱
でもあるのかと疑われるだけだろう。

あー。考えるだけで鬱陶しい。やめだやめ。

とりあえず今はモーレツに眠い 包み込むような眠気に俺はそ
のまま身を委ねることにする。

田を閉じ、再び眠りの中へとダイブを……。

「おい、そこのシリガムスメ」

ダイブを……。

「おひつてば。おめえはいつまで、グースカと他人様の布団で寝てん
だよ！ その白髪の白髪、真っ赤に染めかますぞコノヤロー…」

朝っぱらからいるやこな。ビリのヤンキー女だ。

「一か、ムスメなんざ俺の家に居ないつーの。親父と俺しかない、町内一のむせくるしい家族をなめないで頂きたい。

「恐縮だが、隣の家と勘違いしちゃあございませんかね?。あいに、ここは男だらけの大父子家庭でね。白髪なのは認めるけれども、

布団をかぶり、そう返す。やがて静寂が部屋を満たした。案外とまあ、あつせり引き下がつたもんだ。

少し残念な気もするけれども。今はとにかく 眠い。

「わははは」と

言ひながら、ぬくぬくと猫のよつこ体を丸める。

「ひひひひひひひひ」とかけた時

どすん。

なにかが俺の胸の上に……ぐお!

「寝ぼけんじゃねえよ。そのソラのビリが男だつてーんだー。」

何を。こつせ、さつきから何を言つてゐるんだ。寝ぼけんのはお前のほうだろうが。

ああ、頭に来た。

俺は布団から飛び起きると、フワフワと浮かぶそいつをガシッと

掴んで、

「せつかぐの俺の一度寝タイムを邪魔しやがつて！」「の、クソ猫がつて、猫だあ！？」

即座に慌てて放してしまった。

おいおい、こつやあなんのジョークだ。

なんせ俺の前に浮かぶは、ちびっこ黒猫。こいつが喋ったのだ
といふから頭が痛い。やべえ、マジで寝ぼけてんのかも俺。

じゃなかつたら、なにかの手品か？ そう手で猫の背中辺りを触
つてみるが、

「言つとぐが、糸なんかで吊るされてねーからな……つて、これボ
ー子んときにも言つた気がするぜ」

小さな肉球をやれやれと言わんばかりの口の頭にポフッとあて、
眉間にシワを寄せる。

この仕草。この表情。

「いっは、ホンモノだ……。ファービーのパチモンじゃなうこと
だけは確かだ。

「なるほど。この猫、マスク//で売つたら俺は一攫千金……一生左
団扇で暮らしせるというわけか。益体も無い女が天から降つてくるよ
りも有難いな」

「 ぬわあにが、なるほど。 だてめえ！ つーか、可愛い顔して物騒なこと言つてんじゃねえ、このバカシラガ！」

ほほう。 口は悪いが、それもまた愛嬌。 キャラ的には申し分ない。 これは良い見世物になるな。 上手くいけば遊園地のマスコットキャラクター的な立ち位置もありうるかもしれん。

とにもかくにも悪は急げだ。 僕はそいつを再び掴むと、勢い良くベッドから飛び降り つ

「 うひょえつー！？」

奇妙な鳴き声を発するグーヤとした何かを踏んづけ、

「 おわつー。」

盛大に転んでしまつた。

ジンジンと痛む頭を抑えながら、僕は立ち上がり、そしてギョッとした。

何故ならば、その踏んづけた物体とは

「あつう、痛いよお！ おなか破れるうー！」

どにでもこやうな女のガキンちよだつた。

腹を抱え、うるうると辛そうにのたうち回つてている。
なかなかにファンキーな動きをするものだ。 今時の若者にしては筋がいい。

ふむ、と。俺はそいつを観察してみたりしてみる。

腰まである長い黒髪に、歳は俺より若いだろ？。いや、それもかなりだ。見たところ小学生くらいに思える。

俺が十四だから、四、五つ下くらこか。ガラガラ蛇と蜘蛛が威嚇しあつて、いる柄とこうハイセンスなパジャマを着たそいつは、涙目で俺を見上げると、

「あひーー！ のんびり解説しないで、もつと他になんか喋りとあると熙ひよう」

「おお、すまんチビ助。あまりに見事な転げ回つぱりに見惚れてしまつてな。リアクションの勉強になつたよ、こわさかに」

「いやはや、しかしまあ。なんだ。

「かなり遅れた氣がするんだが、一体お前らは何者 もとい、何処の妖怪だ？ そしてこの少女少女した装飾をした部屋はなんなんだ。スイーツなお化け屋敷ブームが到来することを予見しての先取りなのか」

「よ、妖怪じゃないもん。あと、こりはお化け屋敷じゃなくつてボクの部屋！」

そつ女の子座りのままぱいとわつぱむを向くチビ娘。

「そつか。妖怪じゃないもんつていう妖怪か。座敷わらじにも色々な亜種がいるんだな。また勉強になつたよ、こわさかにな

「違うもん！ 人間だもん！」

「もんもんって、お前はモンザムライかよ。安土桃山時代からタイムスリップでやってきたのか。どうせなら平成なんつー下らん時代じゃなく、もっと未来にしたほうが良かつたと思つぞ」「やうやく

「あううー、ちゃんとしたお話が出来てないような気がするよ。とにかく！ ボクの名前は久樹上ゆりな、だよ。それに、タイムスリップはボクじゃなくって、キミのやつだと思つ……」

「だらうねえ」

俺は未だ温もりを保つベッドの上に座ると、手の中で黙りこじつたままの黒猫をゆるりと解放した。

何を考えているのだろうか、そこには飛び立とうとする、俺の手のひらの上で少女の顔をジッと見つめている。

「だらうねえ、キミもしかして氣づいてたの？」

その少女 ゆりなは立ち上がり、目を丸くした。

「いやあ。正直、やつまでは頭がぼんやりしてワケがわからなかつたが、今になつて意識がはつきりしてきたんだ。ありやあ夢かと思つてたが、お前さんの顔覚えてるわ。俺に魔法少女じつのつて言つてた奴だろ？」

「やう、だつけ」

チビ娘はとほけるよつて言つ。

む。まさかマジで夢だったのか。あの時のトンチキな格好をした少女と瓜二つの顔をしている気がしたのだが。似ているだけか？

「いや、ポニ子。腹を決めようぜ。こいつが俺たちの目の前で召還されたのは多分、そういうことなんだろうよ」

「でもでも！ そんな、簡単に巻き込んでいいとは思わないよ。確かに少し魔力は感じるけど、でも『魔法使い』になるってことは……」

「大丈夫さ。このシラガ娘は絡みづらいが、肝は据わっている。魔法使いとしての素質も十二分にあるぜ、ポニ子ほどじゃあねえけどな。それに、戦力は一人でも多い方がいい」

「……無関係の人なんだよ。ダメだよ、そんなの」

「この世界に、魔力を持つて召還された。これのどこのが無関係なんだつつの。　おめえの気持ちも解るけどよ」

なにやら、やつこさん達で勝手に話を進めてやがるし。当事者置いてけぼり過ぐるが。

ま、どうでもいいがな。魔法使いだかなんだか知らねえが、テキトーに相槌打つて、俺はとつとと家に帰らせてもらうだけだ。手土産にこの、世にも珍しい空飛ぶドル札をぶん捕まえてな。きっと喜ぶだろうな、親父のヤツ。

「もしかして、あのお婆ちゃんが召還したのかな……」

「どううな。あのババアの仕業とみてほほ間違いないと思ひぜ。あまりにもタイミングが出来すぎてるからな。どつかの世界から魔法使いになりえそうなヤツを引っ張ってきてやるから、とつとパンドラの箱を封印してくれつてことだう。それくらい、切羽詰つてるんだうさ」

「それならうど、言えぱいこのこなあ

「何か考えがあるのかもな。……まあ。あのババアはまともじゃねえから、なんとも？」

「あ、つてことはだよ。いっぽいある世界の中から選ばれた一人つてことだよね。じゃあ、もしかしてものすつ」——期待の新人さん？」

「キャパシティーに關しては、お前の方が優秀だとは思つが。まあ、まだ杖も持たせてねえんだ。どれくらい素質があるのかは正直、見当もつかねえな」

「そつかあ。そういうば、杖つて言つてもボクのしかないよ？」

「ああ、それについてなんだが」

長い、長い。

暇をもてあました俺は、とつあえずゆりゆり動く、黒猫の尻尾をちよいちよいと指で弾いて遊ぶことにした。

ていつ、ていつ。ててていつ。

「だあ、バカシラガつ！ 人が真面目に話してるときに尻尾にジャレつくんじゃねえ！」

すさまじいスピードの猫パンチが俺の左頬を強打した。つーか、人じゃないだろお前！

「いって、よくもやりやがつたな、クソ猫あお……」

「このジャジャ猫め。俺が猫派だからといつて下手に出ればこんちくじゅう。

「けつ、さつきからクソ猫クソ猫つて。オレの名は クロエだ。靈獸クロエ。無い頭によおく呑き込んでおくんだな

「ほほ。 そつかい。化け猫さんにも名前があるとは結構なことだね。んで、クロエさんよお。その靈獸というのは一体なんだね。苗字にしてはこたかに訝しいものだが

と、俺はからかい氣味に言つてみる。

しかし。答えたのは少女のほつだった。

「色々、疑問があつて当然だよね。大丈夫、まとめてボクから説明するよ。ボクもイマイチわからんといつて、あるけど……でも、その前にキミの名前を聞かせてもらえると嬉しいな

澄んだ黒い瞳。無垢な視線が突き刺さる。ああ いつのうの苦手なんだよな、俺つて。

テレビでたまにやるような動物特集なんものが、親父は好きらしく、よく居間で觀てゐるんだが、俺はあいつらの人を見透かしたような瞳がキライでね。どうしようもなく胸がモヤモヤして、いつもすぐに席を立つんだ。

「どうしたの？」

ゆりなが俺の顔を覗き込む。

まだ。胸がチクつと痛み、俺はため息をついた。そんな目で、あまり見ないでくれとも言えねえし。

「……ああ、そうそう。名前、ね」

まあ、こいつらに本名を明かす必要もないだらう。ビットも長い付き合いんじゃないんだ。テキトーでいい。

俺はフツと視線を逸らすと、小さな学習机の上に置いてある一冊の本に目をとめた。

季節の花図鑑　か。

そいつをパラっとめぐしながら、俺は氣だるく答えた。

「あー。俺の名前は、シャクヤク。よく、人に珍しいねって言われます。でも覚えやすいようで近所のおばちゃんには大好評です。恐縮だけれど、ヨロシクどうぞして頂ければこれ幸いってなもんで」

しばしの間。

「あんたあ、その妙ちくつんな名前はー。オレの事言えねえだろー。つーか、お前。今、その図鑑からとつただろー。」

クロエが毛を逆立てて矢継ぎ早にシッハム。

いやま、そりや当然の反応だ。

「ええと。それにつけばまだな、」

言いかけたところで、黒髪少女がすいと割り込んで、

「ダメだよ、クーちゃんー。ボクは、とっても可愛いや名前だと思うもん。シャクヤクちゃん……、つづん。しゃくちゃんって呼んでいいかなつ？」

と。

んな名前あるわきやないのこ。フツー信じるかねえ。それに言いづらくないか、そのしゃくちゃんつてのは。妥協してしゃくちゃんでもいいんだぜ。某大手の幽霊様とかぶつちやこるが、や。

いやはや、まつたくもつて。なんだろひねえ、この子は。

俺にはじつもこの子がわからぬ。今までの人生で会つたことないのだ、こんな娘に。

いや、こんな人にか。

だから、この時の俺はじつ答えればいいかわからず、アホ面満開にただ頷くしかなかった。

「わーい、やつたあー！じゃあ、血口紹介も済んだことだし。かい
つまんで説明するね。ボクたちのことは、魔法のことは、この世界のこ
と。そして キミのことさ」

畠ひと、ゆうなは俺の隣にしゃつと座り。そして、ゆうべつと。た
だじしへ、話を始めた。

第一石・シャクヤク異世界に立つ！（後書き）

投稿スピード重視のコメティイものです。楽しんで頂けたら幸せです。
気を抜いてるようでもちょつぴり本気だったりもします。
物語を楽しむヒントその1。『花言葉』

第一回 石・鏡の中で映る少女

「ある日ね、ボクの家に小さな箱が送られてきたの。キラキラたくさんの中石に彩られた、とても可愛い小箱。ええと、確かにこの辺に」

「あ、立派なものだな。」
「はい」とまあ、立派なものだな。

「でしょ。それでね、一体何が入ってるんだろうって開けてみたら、凄い数の宝石がつまつてたの。赤いのとか、青いのとか。とっても綺麗な宝石たちがいっぱい。綺麗だなーってしばらく見惚れてたんだけど、急に爆発したの。ビックーんって」

はて。爆発した割には焦げ痕が見当たらないが。

「というか、よく五体満足でいたな。」

「そんな至近距離で爆発があつたというのならば、普通無事では済まないと想つただが。」

「ち、違つよ。そういう爆発じゃなくつて、なんていいうのかなー。七色の光が、ぶあーつて！ それでそれで、中に入つてた宝石が、ばびゅーんつて、……えつと、あのあの」

「ぶあー、元。ばびゅーん、ですか。」

「まるで子供もみみたいな説明だな って、子供もだつたな。そういや。」

「ふえ～っ。しゃっけやん、ごめんねー。あつひ、クーケやん助け
てええ」

説明係に任命されたクロヒは嫌な顔をするかと思こきや、待つ
てましたとばかりにゆりなの頭上へと着地すると、

「へっ。だれかと思つてたぜ。しおがねえな、こりからはオレが
説明してやる。よく耳の穴かっぽじつて聞くんだな。ええと、
なんだ。そういうの箱だ。こいつは、『パンドラの箱』ってんだ」

パンドラだあ？ こんなひけついい箱がそんな壮大な箱には見えね
えぞ。これやかに、怪しいものだな。

「怪じめ怪じめ。オレだって正直な話、これがあの伝説のパンドラ
かどうかは半信半疑や」

けけつと笑いながら、

「だが、このパンドラ もしくは、パンドラモヂキにはあらゆる
災害、すなわち『厄災』が詰め込まれていた。これはマジだ。そつ、
伝説の箱そのままにな」

「災害か。地震、雷、火災、みたいなアレかい。

「ああ、そんなところだな。んで、それらの厄災は『七匹の靈獸』
と呼ばれる護り神に一つずつ封印され、箱に詰められていたんだ。

ここ数百年は何事もなくピースの元で保管されていたんだが、何が
どう回りまわってか、こいつ ポニ子と一緒に突然パンドラが
送られちまつたワケ。そして、」

しばらく聞き入っていたゆりながそれに続けて、

「そしてね。ボクがそれを開けちゃって、靈獸さん達みんな散り散
りに飛んで行っちゃったんだ……」

なるほどな。爆発というのは、そいつらが逃げ出した瞬間のこと
を言つたのか。

「……うん」

「ぐんぐんと、すまなそりに俯く。足場を失つた黒猫は慣れた動きで
ゆりなの肩へと移動すると、

「だあら、おめえは悪くないつーの。ピースのやうがちやんと
見張つてねえから悪いんだ」

ええとだな。とつあえず『ピース』とやらが何なのか見えてこな
いのだが。

「ああ、ピースつづるのは詳しく説明すれば長くなるが、端的に言
えば魔女だ。この世界で現存する唯一にして最強の魔女。これは、
ババア本人が言つていたから本当かどうか定かじやねえケド」

「ボクは本当だと思う。だつて、そのお婆ちゃんからあんなすつご
い魔法の力をもらつたんだから。絶対、凄い魔女さんに違いないよ
つ」

自信おありなようで。会ったのかい、そのピースとこいつ違うんだ。

「ううん。声だけ、かな」

「滅多に人前に姿を現さないからな、あの婆さんは。出てきたとしても、いつも不気味な面をかぶつていやがるし。そーいや、オレでさえ素顔は見たことねえかも。まあ、それは置いといてだ。そのピースから魔力と杖を授かつたボニ子は、飛んで行ってしまった宝石を集めなきゃいけねえことになったワケ」

ははあ。

なにやら凄い魔女だというのは分かったが、そんなに凄い凄いと言つのならば、そのピースとやらが直々に宝石を探しに行つたほうが速いんじゃあないのか。

わざわざ、ペーペーの子どもに魔法伝授なんていうまどりっこいやり方じやなくてよ。

もたもたしてちゃあやバインだら、厄災つづりくらいだし。

「真っ当な意見だな。オレもそう思つぜ。まあ、答えは単純な話だ。あのババアは、ピースはまともなヤツじやない。何を考えているのか分からぬ変人さ。あいつは自分ではさらさら動く気がないらしい。だが、ボニ子ひとりじやあ全ての宝石を探し出すには、さすがに時間がかかりすぎるつてことで、」

なるほどねえ。中々に読めてきたぞ。俺がア、アレかい。そういうことかい。

黒猫が一矢りと笑ひ。

「アハ、おめでて白羽の矢が立つたといつわけだ。ポニ子とシラガ娘の一人でならスマーズに宝石を集められるだらう、つてな」

あー、予想以上に面倒な話だ。そんじゃま、JJIJからが引き際かね。

「へえへえ。そりゃあ光榮痛み入る話で。だがね。恐縮だけれども、辞退させてもらひよ。俺ア、ロボットやJF世界なんてものは好きだけどよお、魔法なんてものには一切ピンともカンとも興味が沸かなくてね。もう一度ピースといつ婆さんに選抜し直してもらうこととオススメするさね。やつたいやツは沢山いるだらうし。悪いけれどもつてことで、そろそろお暇を」

俺の言葉に、ゆりなが顔を上げた。

「うん。しようがないよね。……無関係なしゃつちやんを巻き込むわけにはいかないし。大丈夫だよ、ボクひとりで出来るもん」

「うん。またあの瞳だ。やめてくれっての、それ苦手だから。あと、しゃつちやんはやっぱり言つていいだろ。」

「……ひつぐ、うう」

つて、おこおこマジか。

ぱたぱたとゆりなの瞳から大粒の涙がこぼれ始めたといひで、耐えきれなくなつた俺は立ち上がり、

「まあ。やう悲觀しなさんな。すぐに代わりはやつてくれるわ。次はあつとい、俺より男前なペんペん草クン辺りが来るだろつわ。そしたら、ペんペんちゃんとかペん草ちゃんとか歯まないよつな面前で気軽に呼べるわ。喜べ。そして笑え。出来たら泣き止め」

と。俺にしあやあ頑張つたほつなんだが。

しかしながら。

「……ひつぐ、しゃつちゃんのほつが可愛いもん。ひつぐ、歯まないもん。ひやつちゃん、うえええん」

いやいや、わざわざ歯んでるし。

「あーあ。ポーネを泣かしてやんの、バカシラガ。しーらね、しぃね。ペースに言つてやる。けけつ」

クロエが茶化しながらふよふよと面白がりに俺の目の前を飛び回りやがる。

「クソ猫オ。ふざけてねえで、どーにかしてくれよ。男が子どもを、しかも女を泣かしたとくりやあ、親父に申し訳がたたねえつて」

言い切つた俺だったが。

ん ? なんだ、この空氣は。

さきほどまでケラケラと楽しそうに浮遊していたクロエが突然ストップし、

「……男があ？」

訝しそうな目で嘗め回すように俺の顔を見る。

ついでに、わーわー泣いていたゆりなも、きょとん顔で俺をジイ
つと見上げている。

「……子どもを？」

「なんだよ。俺のシラに何か変なものでも、」

言いかけたところで、そいつらは顔を見合わせてドッとも笑い出しあつた。

「いやははははつ！ 男が、子どもを、だつてよー。」 こいつは笑え
るぜつ」

「だ、ダメだよクーちゃん。しゃつちゃんは本気で気付いてないんだよ……ふつ、あははは！」

ちょっと、タシマ。マジで何を笑ってんのか理解出来ないのだが。

いやいやいや。そんな、お一人さん。

笑い転げてるとこひすまないけどもさ、なにがそんなにツボに入つたんだって。

「しゃ、しゃしゃんの後ろに鏡あるから、それ見てみるとこよ」

「今までの涙を笑い涙に変えたゆりなが、うつたえる俺に、

鏡イ？

身体をねじると、確かにそこには鏡があった。

「鏡はあるけどもよ。それが、ビラしたって」

時が止まつた。

こんなありきたりな表現が精一杯だつた。

全細胞がそれまでの作業を中断し、口々に「ビラして」とだんだん……と騒ぎ立ててゐるかのよつな。

それほどまでに、鏡の中は狂つてゐた。

「どうだい、生まれ変わつたてめえの姿は。可愛いじゃあねえか、こやかに。つてかあ？」

黒猫のからかいにシッコむ氣すら起せん……。

「おかしいなーって思つたけど、本当に気付いてなかつたんだね。しゃつちやんつてば」

「ああ、やうや。今の今まで気付かなかつた。笑われて当然だつたな。

なんて バカバカしい。

なんて 滑稽な。

長いまつげ。震える桃色の頬。ふんわりと緩いカーブに整えられた銀髪。

版権もののネズミがプリントされたガキくさい白のキャミソールに、やたらに丈の短い水色のスカート。

> 1 1 2 5 2 3 — 1 7 6 1 <

「なんじゅ」「りゅ」

鏡の中のチビ女が俺の拳動を逐一真似やがる。

シャドーボクシングをすれば、鏡の中のそいつが微笑ましいパンチを繰り出し、

メンチを切る仕草をすれば、鏡の中のそいつは悩ましげな表情をするし

「つて、なんじゅ」「りゅああ……」

両手を振り上げて膝から崩れ落ちつつ、もう一度だけ念のために叫んでみる。

が。

やはりといづべきか、掃除の時間にテンショーンがあがつてふざけちゃいましたと言わんばかりのガキンちよが鏡の中にいた。

ふむ。

少し乱れてしまったスカートと前髪をちよにちよにと直しながら、こほんと咳きを一つ。

「おい、「コラアアア！　ニヤン畜生オオオ。命が惜しけりや、悪いことは言わねえ。俺様を元の姿に戻せ、いますぐにだ」

隣でニヤニヤと笑う黒猫の尻尾をシャカシャカと振りながら、「んでみるが、

「そいつは無理だな。オレに言われても、こればっかりはおめえを呼んだピースじやねえとさあ」

「だつたらピースを呼べ！　俺は男に戻つて元の世界に帰るつ。」
んなふざけた話があるかよ！」

「さうと、クロヒはスッと真顔になつて飛び上がり、

「元の姿に戻り、そして元の世界に帰りたいのなら、いくら探したって方法は一つしかないぜ。お前が第一の魔法少女となり、ポニ子と……ゆりなと一緒に散らばった宝石を全て集める」」
うあがいても、これしかテメエに道はねえよ」

俺を見下ろしながら、冷ややかな口調でそう告げた。

第三回・まな板の上の猫

「こつは……。

なんて、簡単に言いやがる。

だいたいに何故、男の俺がガキ娘の姿に変えられてまどかといやらを探さなきやならんのだ。

ハナつから女を選んで、そこつにせりせりあいこのこと。

魔法少女なんてもんは、女の仕事だろ。

「せつかも言つたが、ピースの考えはオレだって良くわからねえぜ。これは多分だが、察するに大物になりつるであろう素質さえ備わつてりや、性別はどうでもいいのかもしけねえな。どうであれ、性別を変えるくらい、あのババアだったら朝飯前だね」

「だから、どうちでもいいなら、なんでワザワザ女に変える必要があるんだ。男のまんまでいいだろ。魔法少年つてことだぞ！」

「あー。言われてみりや、そつだな。つーん。ほら、アレだら。ピースの趣味。

魔法使には、やつぱり少女じゃないとダメっていつも」

イヤな趣味のババアだな……。

「自分が歳を食つてゐるつていうんで、若い女を従えてピチピチエネルギーを吸収しようとしてこる、とかな。にしつしー。」

ピチピチエネルギーで。

「魔法世界の上下関係なんぞ、まつたくもつて知らないけどもよ。そいつは偉い魔女なんだろ？
よくそんな口の悪さでやつていけるな。俺がピースだつたら、とりあえずお前さんをクビにするだ」

言いつつ、ゆりなの横へどつかりとあぐらをかいた俺に、

「それは出来ないと想つよ。だつて、クーサさんは特別だもん」

すっかり笑顔を取り戻したゆりなが、白慢げに無い胸を仰け反らせながら言つ。

「しゃ、しゃしゃん。」

……ん？

「むーっ！ ボクだつて一恋女の子なんだからねっ」

ふうん。

イッショ前に顔赤らめて、まア。

「わりい、うそうそ。言葉の綾だつて。日本語むつかしいアル」

「うー。訂正を要求します！」

謝罪までいかなくて良かつたよ。

「オーケイ」

んじや、えーと。

すっかり笑顔を取り戻したゆりなが、自慢げにナイズバディを仰
け反らせながら

「あ、そーゆー意味じやなこよつー。」

泣いたり笑つたり怒つたりと。

なんとも忙しい奴だな。

「あつ

ゆりなが驚いた声を出し、俺の顔を覗き込む。

「な、なんだあ？」

「今、しゃつちやん笑つたでしょ。とつても可愛かつたよ

にへへーと屈託のない笑みを向ける少女。

……つたぐ。

俺ばかりが面食いつて、どうもね。割に合わん。

やうだな、いはひとつ。

「なんだ知らなかつたのか、俺はどんな表情でも可憐いんだぜ」

耳にかかる髪をかきあげながら囁つてやる。

ちなみに「の仕草は俺が一番グッとするヤシだ。

「うん。」

つて、おー。

「ナーナは否[ばく]定してくれつて、[冗談に決まつて]だらつよ。恥ずかしい

「えへへ。恥ずかしがつてゐしゃひやんも可憐こみ

「……そつやどーも」

「うつこえぱ。

せつや、じこつに顔を覗き込まれても胸が痛まなかつたな。

どつでもここ話ではあるけども。

「仲良き」とは美しきかな。微笑ましいことの悪いが。おめでり、
ちよつち窓の外を見てみそ」

唐突に、クロヒガシリアスな声色で言ひ。

「へ？」

一人で外を見やる と。

朝焼けの中に一匹の蝶々が舞つていた。何故かその羽根は淡緑色
に発光している。

「ほよー。光つてゐるキレイな蝶々さんだ。あはは。やつぱし氣にな
るんだ?

なんだかんだ黙つて、クーちゃんつて猫さんだよね。

今日のこやんじにてレビに出てた子も蝶々さんと遊ぶの好きだ
つたし」

クロヒはやれやれとばかりにため息をついて、

「バーロホ。おめでり、羽が光つてゐるテフテフなんぞ現実にいる
わきやねーだる」

「えつーー？」

俺たちは同時に驚いた。

浮遊する猫が存在しているくらいなんだから、光つてる蝶だつていそつなもんだけだ。

「シラガ娘は勘違いしてるみたいだが、オレたちが特別なだけであつて、世界自体は至極真つ当なんだ。

みんな、魔法なんて現実にあるとも知らずに暮らしている。

それこそマンガやアニメの世界のものだつて認識さ

といふことは、俺が元に居た世界とあまり変わらないのか？

「どうかな。まず、おめえがどうこつた世界に居たかを知らねえし。まあ、自分の目で確かめてみるとことだな、早速よ」

早速　？

「オレの話きてたる。パンドラから逃げ出した七匹の靈獸を魔法でぶちのめして捕獲し、宝石へと再度封印をするつてよ」

逃げ出した靈獸と宝石集めどりのせきいた氣があるけども、具体的な流れは今初めて知ったぞ。

「じゃあ、今言った。ほら、ボケボケしてねえでの蝶々を捕まえに行くぜ、ボーネー！」

「ええーー！ せめて着替える時間が欲しいよお。出来れば髪を結つ時間も……」

「んなノンキに構えてる余裕あるわきゃねえだろー！」

「は、はつ

どちらだけでもと、羽織つてバタバタ部屋を出て行くなりと黒猫を見送り、俺は肩をすくめた。

いやはや大変だねえ、魔法少女とやらは。

こんな朝早くから出勤だなんてさ。恐れ入るね。

「わはははーと

ベッドの中へ入り、ぬくぬくと猫のまつこ本を丸める。

「はいはいはい」とかけた時

じすん。

なにかが俺の胸の上に……ひへ、べおー。

「いのやつ取つときもやつただい。こーから、おめえも来るんだよ、バカシラガ！」

一度も踏んでくれやがつて。小れこ胸が更にくつこじまつだらうが。

「……小さこもなにも、まな板同然じやねーか

「むーつー！ 私だって一応女の子なんだからねー

頬を膨らませて、言つてみたり。

「わあつた。漫才なうとでこへりでもなき合ひてやるから、マジでもう行くぜ

呆れ口調で返される。

「へえへえ、切羽詰まつてこるよつで」

「放つておいたら、誰かに見つかって大騒ぎになるかもしんねーしな。
それならまだしも、暴れて町を壊されたりなんかしたらもつと厄介だ」

厄災を抱える獣、か。

久々のシャバだ。遊びたくなるのも解る。
やむかたなし。

行くしかないってワケねえ、どうしても。

外に出るとゆうなが今にも泣き出しそうな顔で、

「ビ、ビ、見失つちやつたよお」

せわしなく足踏みをしながら言ひ。

その足踏みに意味はあるのかと問いたくなるが、その前に黒猫のツツコミが入つた。

「あんだと、先に追いかけてるつて言つたじやねーか！」

「だつてえ、一人じや心細いんだもん……」

にへへと照れながら、両人差し指の先端を合わせてモジモジ。

なんともまあ。

現実にそんな仕草をするヤツ本当にいるんだな。

「かあー、なつさけねえ」

やれやれと大げさに嘆くクロエ。

「いやはや、それでも天下のグレート魔法少女かい？」

続いて俺もからかい氣味に言つてやる。

「はう。ボクは天下でもグレートでもないよ……。

この前なつたばっかだし、魔法だつてまだ一個しか知らないもん

そう、うな垂れるゆりなに俺は肩をすくめた。

「うーむ。マジメに返されてしまつと、なんとも。

「つづーか、ボニ子を責めてんじやねえ、おめえがチンタラしてい
たからだろ！」

突如、繰り出された猫パンチがみぞおちにクリーンヒットする。

へそ丸出しルックの今の俺にそれは大ダメージなワケで。

「誰だよ、キャミソールなんて防御力皆無なもんを俺様に着させた
奴はア。

「イテテ、こんのバカ猫お……自分でってガーガー言つてたクセに」

「いいんだよ、オレは。ポニ子をイジめていいのはオレだけだ、おめえにはまだ早い。これとかにな」

ふんぞり返つて言つ黒猫に、俺とゆりなは顔を見合わせた。

なんだその、好きな幼馴染の女の子にけりかいを出したヤツに怒り心頭のガキ大将が胸ぐらを掴みながら言つてそうなセリフは。

「……よくそんな例え、瞬時に思いつくよな

それは贅辞として、受け止めとおへりとおへり。

「あ、あのう……。クーちゃん、蝶々さん追つかけなくていいの?」

と、ゆりなの発言にクロエはハツと思つ出したかのよつこ、

「おつと、そうだった。それじゃあここは二手に分かれて探そ。う。オレとポニ子は左へ行く、シラガ娘は右を頼むぜ」

「ほい、了解うけたまわりつー。しゃつちゃん、見つけたら知らせてねつ」

もう言ひて、そそくさと一人で立ち去ってしまった。

ポツーンと佇む俺の田はまうと点のようになつていていたことだらう。

おこおこ、ちよつと待つてくれ。一つ疑問なんだぜもよオ。

見つけたら知らせねつてや、ビツコツた手段で知らせりやいいんだよ？

心中で嘆いた後、俺は一人寂しく右の道へと歩を進めることがした。

+

+

+

口笛を吹きながら頭の後ろで手を組み、適当に歩き回つてはみるが。

「いねえじゃんよ……」

周りを見渡せど、それらしい蝶なんざ一匹たりとも見当たらぬ。

トンボや天道虫なら山ほど見かけたけどさ。

「やつてらしねえ」

俺は公園のベンチに腰を下ろして、空を見上げた。

ゆづくと流れる厚い雲、暖かい陽光。鳥のさえずりが瞬きを誘ひ。

「なーにやつてんだる、俺ア」

知らん世界に飛ばされて、いきなり知らん道を歩かされて。

魔法少女になれだの、靈獸とやらを捕まえろだの……よ。

これがロボットに乗つて世界を救えとかいつ、熱い展開ならまだ
気は乗らないでもねエが。

ん?

そもそも、何故俺はあいつの言ひとをマジメにきいているんだ。

黒猫の言葉を思ひ出しつめる。

たしかあいつは、

俺が第一の魔法少女となり、あのチビ助と一緒に全ての宝石を集

めない限り、

元の姿および元の世界に戻れないと言つたな。

もしも、それ以外に方法があるとするのならば。

例えば、扉みたいなモノがあつて、そこへ入ると現代に戻れるみたいなさ。

そんなもんなくとも、何か情報が掴めるかもしれない。今はちょうど自由に行動出来るし。

あいつらと仲良しじつをして宝石を集めるなんざ、長つたらしくてやつてられんし、それ以上に性に合わん。

「どうせだつたら……脱出方法を探つてみるか？」

そう一人呟いたつもりだつた。

しかし、その時。

「肯定です。探つてみましょ「うです」

小さな返事が返つてきた。

ゆるりと視線を下げる、田の前に少女が立つていた。

俺だつて今は少女の分類に入るかもしけねえが、その声の主は更に幼かつた。

いいところ五、六才あたりか？

> i 19195 — 1761 <

今にも躍つてしまひやうなトロンとしたエメラルドグリーンの瞳に、

ペリドットカラーのセリセリシーサイドアップ。

やけに袖の長い園児服のようなものを身にまとつた彼女は、一旦視線を彷徨わせたあと、

「肯定なんです」

もう一度、俺をジッと見つめて言った。

「つやあ。どう見ても俺に向かつての発言だよなア。

次から次へと 今日は間違いなく厄日決定だ。

わはは。

「あー、外回りで疲れてるんだ。田本のお父さんは忙しくなあ。今日なんてまだ一台も契約が取れなくてさ。来週までこのまま取つて来いなんてムチャ言つんだぜ、

まったくもつて、現場が見えてねエんだよなデスクワーカー共つて奴ア。

とまあ、詰まるといふのあつちへ行つて一人で遊んでくれると助かるのだよつう事だ。しつじ

手を振るジエスチャーを見ていないのか、そいつは異そつな目をパチクリして、

「パパさんなんですか？ ママさんに見えます」

「ママもんつて……んな歳でもねえよ。見てみた、このペチャピチの玉のよつな肌をよ」

「否定です。口ロナのほつがピチピチなのです」

そりやまあ、お前もんに比べたら敵わんて。

「あ、んなこ」たアビーでもいこワケで」

俺は背後にある、カラフルな遊具を親指で指しながら、

「悪イけれどもよ、チビチビ助。遊び相手なら、セイのジャングルジムさんこでも頼んでくれ」

しかし、そいつは動かずにただひたすらと俺を見つめ続ける。

「あんだよ……。ここに事あるとなんう素直に立つたひじつなんでえい」

「自分は口ロナです。チビチビ助ではないのです」

あーそう。

「そりやあ、すまなんだ。じゃあチロロロロネウサ、セイのジャングルジムさんこがねてもう立つよ」

直つて立ち上がり、腰をポンポンと叩いていふと、

「口ナです。チョコは入つてませんので、あしからず」

ぼそっと囁き、俺のスカートを掴みやがる。

なんなんだよ。何が目的なんだ、こいつは。

「わかつたわかつた」

やや乱暴にチビチビ助の頭をグシグシと撫でて、

「あばよ、口口美！」

そう颯爽と立ち去るつとするが、一向に前に進めん。

振り返ると、口ナが未だに俺のスカートを掴んでくる。

つづーか、何だこのパワー。ガキンちょの力じゅねえぞ。

「だあら、なんだってんだよー？」

俺が語氣を荒げると、そいつは一瞬ビクつとしたあと、

「「、「口口ナは……喉が渴いたのです」

指をくわえながら、チラッと公園中央あたりの水飲み場を一瞥する。

「ああ？ するつてえと、おめえさん俺にあそへ連れて行つても
らうてえのか？」

▽.119303 | 1761▽

眉をひそめる俺に、口口ナは「クンと頷いた。

まあ、確かに水が出る場所はやや高に位置にあるな。

「のチビチビ助なら抱っこしてやらなければ届かないだろ？。

それくらこなら そう考へてこると、

「……めつぱ、いのです。否定するです

急にそこは首をぶんぶん振つて、俺のスカートから手を離した。

「「めんなさい、ママさん

探さないでください、と続けてトボトボと歩き去っていく。

一体なんの心境の変化があつたのか。

ま、これで邪魔者は居なくなつたな。

邪魔者は 。

その時、俺の頭の中に嫌な思い出がよみがえつた。

久しく忘れていた、あの吐き氣のするようなやり取りがリフレイ
ンする。

「……あー、マジ面倒くせ！」

俺はスカートのポケットを探つた。

「……世界に召還される前、確か俺はコンビニへと買い物に行
くといひだつた。

そこいらへの記憶が途絶えている為、多分その途中で俺はこいつ
に召還させられたのだろう。

だから、確信はあつた。

「四百円ど、ひこふうみい……。七十円か。」この世界の自動販売機、日本の金使えりやいいけど

俺は小銭をもつて一度ポケットに押し込み、

「この俺が、センシティブに」

自分の柄にもない行動に嘲笑しつつ、あのチビチビ助を探すことにしてた。

+

+

+

程なくしてそこには見つかった。

そりやあ、同じ公園内で「ラン」を一人で漕いでいたからな。

探してくれると言つ方が無理がある。

「おこ、口口美。行くぞ」

声をかけるとそこにはピックリしたように顔を上げた。

「え？」

「コロナの前に腰を下ろす。その時、一瞬彼女が目をつぶつたよう

多分、恐がつているのかもしね。いや、絶対だな。

そりやあ前の世界では散々恐がられてはきたが……なんだろうな、この胸の痛みは。

ただの成長痛だと思っていたいところだがね。

「ああ、そうか。こうだな」

ぐるっと回転し、背中を見せる。

「もしかして、おんぶですか？」

「肯定するぞ」

「で、
でも」

「乗らねえなら、今田の営業は終わりだ。さつき無線で、空いてるよつなら三丁目の三さんを乗せてくれ

つて頼まれたもんでやア」

テキトーに言つとい、

「の、乗るですかー。」

ナラ中でダイブを決め込むコロナ。

「軽い軽い

よつこせとおんぶし直して、立ち上がる。

とあて、自販機はどこかね。

+

その後、なんとか自販機でジュースを買った俺たちは、先ほどの公園のベンチへと舞い戻つていた。

「うめえーか?」

ついでにと自分の分に買つてきた八十円で一個入りの乳酸菌飲料を呷つた後、訊いてみる。

「ロナは両手でペットボトルを掴みながら、

「肯定、ガボガボ。美味しい、ガボガボ。れす」

「いや、無理に声を出せんでもいい。こんな公園のど真ん中で溺れ死んでもらつても困る」

しかしまあ、どんだけ喉が渴いてたのやら。

みるみるうちにボトル内のはちみつレモンジュースが無くなつていぐ。

やがて、

「けふ」

と小さなゲップをすると、ペットボトルを下げて、同時に頭も下げる。

「ありがとうございました、ママさん。完膚無きまでに幸せでした」

「これとかに間違えているような気が否めないが、まあ喜んでもらえて何より。

あと俺はまだママって歳でもなければ、性別でもねえから。それともう少し話してなもんでー」

さて、いい加減に時間を貪るに貪ったな。あのバカ猫にせざるのもシヤクだし。

それから、ガキのお守つはこれへりこでいいだろ。

「んじゃあ、今度こそあまよチビ助

頭をポンポンと優しく撫で、

「……悪かったな。やつめは恐がりがちまつて

一応言つておく。別に本心ではないからな。

親父に女子供を泣かせるなつて言われたからや、ただそれだけの話だ。

今度こそすんなり帰してくれただらつと踏んでいた俺だったが、

「ママ、つづん。パパさん」

再びスカートを掴まれ、前につんのめりてしまつ。

「次はなんだア？ シヨンベンに連れてつてなんぞぬかしやがつた
ら」

やれやれと振り向くと、

「田、田がピカつてゐるー？」

俺はギョッとして半歩さがつた。

なぜならコロナの縁眼がライトのように光つていたからだ。

比喩などの表現ではなく、マジで明滅していくワケで……軽くホ
ラーの領域入つてゐるぞ、こりゃあ。

「……来てください。渡したいモノがあるのです」

度肝を抜かしている俺をコロナがさうりと促す。

来てください、と言われてもなア。

「やうやくやれました。」

親父に、知らないう子供につづいて行ったり、物を貰つたりしたらダメと諭われているもんですか。

いや、色々な意味でね。今の『時世』

と。

おどけたり言つてみるが、

「パパさんには無くてはならない、とっても大切なモノです。お願いです、ロロナを信じてみやせつてください。まちみつノモノのお礼なんです」

「やうやくやれました。」

首筋を一つ。

「わあーつたよ、やんなに遠くなつたら行つてみるわ

だつて。やうやくしがねやじやん。

あんな、どこを見てこののかわからなことひな瞳で、口を真一文字に結んでしゃつてや。

逆らつたら何をされるか。なんていつか、アレを感じるぜ。え
えとアレは。

「ふれっしゃあ

「やうやう、フレッシャーだ！」って、ちよこ待ち。ひょっとして
おめえさん人の心が読めるのか？」

嘘だろ、おい。Hスパー少女って奴か？

いや待てよ、もし読めるとしたひ。

ふむ。

「こいつをかいつて一儲けできるかも……いや、その前に帰れない
んだつづーの。

「否定しますです。パパさんだから読めるのかもです」

なんじゃそりや。俺の心だから読めるって、ビリコツ意味だよ。

俺が首をかしげていると、そこは無言のまま踵を返してスタス
タと歩いて行ってしまった。

「お、おこー、待てってみ、ロロ美ー。」

慌ててついて行こうとする俺に、チビチビ助が振り返つて、

「あー、ロロナのことをお金儲けに使おうなんて考えちゃ、めつです」

そう釘を刺されてしまった。

飛んで喋る猫とエスパー少女、中々良い金になると困ったのだが。

これはこれは。

第五石・その名はレイメイ

「ローラーなんですか」

「ロナが言って立ち止まつた。

「なんですかって、言われてもさア」

改めて周りを見渡すまでもない。

「こんな何処にでもありそうな森のど真ん中で立ち止まられてもな。もう案内は終わりましたとばかりに伸脚運動を始めたそいつに、

「若いうちからそんな運動してたら、膝痛めるだけだぜ。つーか、ここに何があるってんだい。」

そもそもとして、俺に渡したい大切なモノって何なワケ?」

後ろ毛をイジりながら訊いてみると、

「あ。その質問にはロナがお答えします」

いや、最初からお前に説いてるんだけじゃな。

「えと、やつぱつ説明するよつ」ひちです」

「言こながり」そとポケットに手を突っ込む口ロナ。

やがて薄紫色の小さな手紙を取り出すと、俺にホイッと渡して、

「それ、読んで欲しいのです」

「まう。これはこれば。

キラキラに光るハートのシールで丁寧に閉じられてこむ可愛らし
い手紙。

とくづりやあ、一つしかあるめえ。

「いやはやまわか、これは恋文と呼ばれるモノかね」

そんな、からかい気味の俺の発言こ、

「肯定。口ロナはパパさんに一田惚れしました。

お返事待つてます、そここの伝説の樹の下で。ずっと、貴方を

と描きす方向には、古びた切り株しか見当たらぬワケで。

「口口美よ。伝説の切り株なら見つけたぞ」

「では、伝説の切り株に座つて手紙の内容を口に出して読んでみちやつてやせ」

相変わらず掴めんチビチビ助だ。

とにかくにもどり、腰を下ろした俺は手紙を読んでみるとこいつだった。

「ええと。なになに……字が汚くて読みにくいいんだが

「当店ではクレームを一切受け付けておりません。なにぶんまだ幼稚園児の身でして。

お手々があまつまつとをきかないのです」

そりやあ難儀なこつて。

しゃあねえ、なんとか解読していくか。

「て、天より舞いあいし、ググツの利子よ今ふだだび我がもとえ
蘇れ つて、どういう意味だコレ」

眉間にしわを寄せながら手紙を舐めるよつに見る俺に、

「否定です。それは、天より舞い降りし傀儡の石よ、今再び我が下へ蘇れ……と読むのです」

「あるほど。天より舞い降りし、傀儡の石よ。今再び我が下へ蘇れ、か。

言われてみればそう読めなくもないな。というか、口で説明したほうがよっぽど早かつただろう」

そう苦笑する俺に、

「おやおや。パパさん。今、それを口に出して書つやつしましたね

急に顔色の変わった口口ナニビクつとして顔を上げる。

「こよによ、この時が」

「口ナの眠そうな目が見開かれていた。

心なしか口元が笑つてゐるよつにも見える。

「ああ、でもまだダメなんです。あともう一言が無いと、アレは酔らない」

な、なんだよ、アレって

「ああ、パパさん。『靈鳴』と書つてみてください。さんこーいち、
はーアクション」

「……れいめい？」

促されるがままに口を突いて出た言葉、靈鳴。

何だソレ。

つーか、さつきの天より舞い降りしつて、もしかして呪文とかいう類の

「ぶいっ、大当たり」

「ロナが丶サインを出したその時、頭上が青く光り輝いた。

眩しい光に俺はすぐさま手をかざす。が、何だこの強い光は。

皿をつぶつているのにも関わらず、光が我さきこと俺の網膜へ飛び込んで来やがる。

「パパさん、そのまま左手を前に出してみて下さい。何か触れるモノがあると思うです。」

何かって。ええっと。

ああ、あつたぞ。これか？

ほんのつと暖かい石のようなモノを掴む。

すると、たちまち光が消えていった。

やがて皿の慣れた俺は、その石をじっくりと観察してみる。

蒼くて透明な手の平サイズの石。輝き方がガラス細工のそれではない。まさか宝石か？

だが、何と言つたらいいのか。物自体は良いのだが状態がボロつちいのだ。

といひに亀裂が走つていたり、赤いコケが付着していたり。

あと、やけに長細い藻屑が幾つも巻きつっこる。

「……ずっと、冷たい海の底に沈んでいたのです。かわいそうに『

もしかして俺に渡したい大切なモノって、この靈鳴とかいつ石のことか?」

「ロナは頷きながら、

「肯定。正式な呼び名は試作型靈鳴石』『ボボ』なんです、

へえ。『大層な名前だねエ。試作型という部分が、こせせかに気にはなるが。

で、この石のじるは何の使い道があるんだ?

「それはただの石のじるではないのです。それきの手紙の続き、読んでみちやつてください」

草むらから手紙を拾い、続きを読む。

そこには、ロナの字とは似ても似つかないかすれた文字で二つ書かれていた。

「正式封印解除の呪文をここに記す

イグリネイション」

「イグリ……ネイション」

眩いたその瞬間、天から青い閃光が降り注ぎ、そして俺の手元を包み込んだ。

「な、な、なんだアア！？」

凄まじい勢いで全身の力が抜けしていく。

まるで俺のエネルギーが石に吸い取られていくかのような……待て待て、こりゃ本氣で立つていられねエゾ。

ちよちよ、いや、マジで、吸い取り過ぎだつて――！

× 21495 — 1761 ×

「あ、あう！」

ペタンとすっかり腰が抜けてしまった俺の手の中に先ほどの石の姿はない、

代わりにヘンテコな蒼い杖が握られていた。

「パパさん、杖の封印解除よくできました」

涙目で見上げた俺の頭をコロナがよしよしと撫でる。

「、こんなやうな。何がよくできました、だ！」

何か文句の言葉でもぶつけたやうに呟いたその時、

「魔法少女、おめでとー」

と、もう一度Vサインを決めながら更に氣の抜けるよつなーとを言い放ちやがった。

無表情のクセに満足げな空気がひしりと伝わって来る。

上手くじゅったり、ってかあ？

くへじゅつ……。

第六石・対決・ゆうな△口ナ

パキッ。

音のした場所へ顔を向けると、ゆうなが驚いた表情で立っていた。

俺の視線に気付いたのか、そこには慌てて樹の陰に隠れると、

「ひ、ひへひへほーし。みーんみーん。ほーほーほつほーつ」

また旧式なとぼけ方を。

「一か最後のそれはセイジやないだろ。朝によく鳴いてるアレだ、アレ。

「ヒヤ、ヒヤ。バレひやつた」

「つたぐ。みんなとハジロハジロ」とゆオ」

「わ、『めんなさ』。つこビックリして隠れちゃった。すつ『い』が見えたから走ってきたんだけど……。

あのー。しゃつせん、もしかしてそれって、杖 だつたり?」

おずおずと語りゆりなに、

「ま、魔法少女……はじめました」

氣の抜けたバサインをしつつ、春なのでと付け足して囁いてみる。

何故、春だから魔法少女をはじめるのか我ながらよくわからんが。

「ふ、ふえええええ！ しゃつちやん、本氣なのー？」

本氣もなにも。

驚きたいのは俺のほうだつての。

積もり積もつた愚痴をぶちまけたいのは山々なんだけれども、その前にちょっと肩を貸してくれ。

「、腰が抜けちまつてやア。

「へ、うん。 もやつー」

トテトテと走り寄ってきたゆりなが悲鳴をあげて盛大にズッコケた。

「おーい、大丈夫か？」

「だいじょばない……。しゃつかせん、足がちべたくて動かないよお」

涙目で訴えかけるゆうなの足元を見ると、何やら黄緑色の石が足を固めていた。

「それ、ロロナの魔法です。つめたい、氷なんです」

「やいやいや。せ

なんです、じゃあないだろ。

「どーこいつもりなんだい、ロロ美。悪ふざけだかなんだか知らねえが、今すぐ魔法を解いてやれって！」

すると、

「否定。ロロナは、今からロロの旧魔法少女さんに戦布告します。魔法少女はパパさん一人で十分なんです」

言いながら浮かび上がるコロナに、蝶のような光り輝く羽が生まる。

おー、マジかよ。もしかしなくても、これって戦闘体勢つてヤツ
じゃないのか。

「な、なんですかうなるのーつー?」

俺とゆりなが同時に声を張り上げるが、そいつはあっけらかんと、

「なんでって、何となくです。なんか貴女を見ているとモヤモヤするのです。

とにかく魔法少女はパパさんだけで十分だと判断しました」

「ジーリーをじう見て、わがこいつ判断に狂つたんだお前は。

俺はただ腰を抜かしているだけだぜ、なんとも情けない話だけれども。

「ま。 そゆことなので。 もう死んじゃつてください」

言つた直後、

「待てえええい！ ほんの、バカクロナー！」

凄まじいスピードで飛んできたクロエがチビチビ助の腹へと突進をかます。

不意の一撃にクロナの羽は消え、そのまま地面へと呑きつけられた。

しつかしながら。

止めるためとほいえ、少しあがめじやあないのか。相手は子供だぜ。

「バーロー。姿かたちまじうであれ、オレたち靈獸は、そりやくやすと傷つかないつてーの」

「えつ、待て待て。オレたちつて事は……。もしかして、お前もあのチビチビ助も靈獸つてヤツなのか？」

俺に続いてゆりなも、

「じやあ、あの子つて朝の蝶々さんなのー？」

顔を見合わせる俺たちの間に黒猫がふよふよと入って、ため息まじりにこう言った。

「い、今更、気付いたのかよ……。あいつは三番石であるヒメラルドに封印されていた縁蝶ロロナだ。

能力は、『水』と『氷』。見た目はチビガキだが、七大魔宝石のうちの一つだからな。油断は出来ねえぜ」

そんな情報を一気に詰め込まれても、なんだよ、七大なんたらつて。

「じつやうひ説明している時間は無いみたいだぜ」

クイッと肉球が指す方向にはむくれつ面のロロナがあひる座りで、

「むー、ほんほん痛いのです。はちみつレモンが出しゃこやうです」

じつちを睨みつけていた。と言つても、あの眼そうな田だから迫力は皆無に等しい。

それより、もつたいないから出すなよ。

百五十円もしたんだぞ、根性で飲み込め。そしてお前の血となり肉となる。

「肯定です。パパさん。園児の『根性』みせます」

なんでお腹をさすりながら口をモヤモヤ動かしていくロロナを背
に、

「今のおちだ、杖を呼んで戦うぞ。やれるな、ボニ子。足かせの氷
魔法はもう解けているハズだ」

ズッコケたままの姿勢でポカーンとしていたゆりなが、ゆっくり
と自分を指差して、

「ふえつ。ほ、ボクがやるの？」

「あつたりめーの酢漬けイカ！」

「このバカシラガは杖はあれども魔宝石を持ってねえんだ、今やれ
るのはボニ子しかいねえ！」

「……はう」

いやはや、面田ねー。

しかし、まあ。」」」せーつ、先輩のお手並み拝見つて」」」。

腰を抜かしながらゆるつと観戦せかトモハハヒトヒサムル。

「ボニ子の動きをよおぐ見ておけよ、シラガ娘。おめえも遅かれ早かれやつともりつんだからな」

へえへえ。わかりましたんで。

「はう、なんか緊張するよ。しゃつちやん、あんまりジーっと見ないで~」

顔を真っ赤に染めて、ぽりぽりと頬をかくゆりなに、

「あの。おやでお願こしあや」

指をぐるぐる回しながら「ロナが言へ

ど」で覚えたんだ、そんな業界用語。

「ふあ、『めんなさい』。も、もしかして待つてくれてるの~。」

「肯定。一応、フニアでやらないと楽しくないですから。あと、ロロナは靈獸なので手加減なんてしないでください。本気で来ても大丈夫です。どんとこいーい」

それを聞いてホッとしたのか、

「えへへ。そつか、じゃあ全力で頑張るねー！」

ゆりなはそういって、手を高らかに掲げて、

「来てつ、靈真！」

数秒も経たないうちに、黒い宝石が空から飛んでくる。

呼べば飛んで来るつて……今時の魔法少女は進んでるんだな。

そして、それを掴むと同時にゆりなはこう叫んだ。

「イグティレホトー！」

黒い光がゆりなの手元を包み込む。

ほほう。これは、また。俺のときと呪文が少し違うようだ。

慣れたもんじで、宝石をさつと黒杖へ変化させると流れのまま」、

「クーサヤン、お願ひ」

「あいよつ！」

「ねんと空中で黒猫が一回転すると、藍色の宝石へと姿が変わった。

ん 宝石？

わっけいの猫は自分を靈獸と言つてこたよな。」こつも七大なん
とやひだつたりするのか？

するつてえと、七匹の靈獸の「けいはい」の場に居るつてことで
……なんだか案外すぐ集まつそうだな。

そんなことを考へてみると、

「セーのひ」

ゆりなが杖を両手で持ち上げ、宝石くと勢い良く振り下ろした。

その瞬間、割れた宝石の中から黒い大蛇のような稻妻が発生し、

ゆりなを頭から喰らう。

なんて、迫力だ。予想以上に派手つづーか、コレ大丈夫なのかよ。

クロエが変身した宝石は割れちまつし、ゆりなは雷に喰われるしで。

唚然としていると、ゆりなの全身を覆っていた稻妻が徐々に小さくなつていく。

「あ、ああ……」

稻妻が完全に消えると、そこには黒いドレスに身を包んだゆりなの姿があった。

さつきまではパジャマにびたり姿だったのに、いつの間にそんな豪華な衣装に着替えたんだ。

藍色に煌めくオーラがゆりなの体を彩り、時たま黒い稻光がバチと周りに発生している。

→ 22409-1761 ←

「いやあ、嘆声をもらしてしまつのも無理はないって。

なるほどな。これが魔法少女、ってヤツ……ね。

「 お待たせ」

さつ めまでの調子はいいへやが。

急に凜々しい顔つきになつたゆりなは、杖をブンブンと振り回して、

「行くよ」

息をつく間もなく、跳躍した。

第七石・雷と氷、どちらが強い？

「よーしー『アイスウォーター』ちやん、かかつてもなさいー。」

ふよふよと沸騰しながら、

「クロエが魂よ、我に漆黒の雷を宿せつ

ゆつなが叫ぶと同時に、杖に黒い電流が走った。

何か攻撃を繰り出すのか？

期待をじつじつ待つてみるが、

「えーと…………しゃつちやん。それから、なにして叫んだひつか

「あ、あのなア……」

つたく、俺に訊くなつて。

さつさつしづかに凛々しい顔つきになつたなと思つたのだが、
いやねや。

「イカズチ？ 憑いてるのはお姉ちやまなのに。あ、そつか。今回
は……」

田は黙れながら、怪訝な顔で手をピクッと動かして、

「分が悪いかもです。だつたら、」

自分の手の平に息を吹きかける。

「つやあ、なこしてんだ？」

「ふうーっ」

おお。見る見る少しだけ水のつぶてが生まれていくではない
か。

中々に便利そうな魔法ではあるな。夏場とか特にもつていいだ。

いやいや。それよりも。

ゆづなせといき『アイスウォーター』ヒロ美を呼んでいたな。

多分、察するにクロエから教わった黒名とかだらう。

氷と水の使い手らしいからな。

氷に、水か…… 一体どんなエグい攻撃をするんだろうね？

「でけた」

やがて完成した氷の塊を握りしめると、ロロナが跳躍いやコ

レは飛翔と言つたほうが正しいか。

煌めく羽を羽ばたかせて、ぐんぐんゆりなに接近し、

「ほよ？」

ぽけつと見上げたゆりなの服、胸元を引っ張ると、

「ポイ捨てじめんです」

氷を入れた。

「ひやああああー つめたー いつー」

……そして墜落するやつな。

「ハ、今度は背中のほうに移動してるー。ひーん、一張羅がビショビショだよ。」

なんて落ちたあとドレスをぱりぱりせりながら氷を取り出
そつと格闘してくる。

あー……。

すまないが、ちいとばつかし言わせてくれ。

「つて、なんなんだア！」この拍子抜けするようなバトルはー。

チビ助、お前それでも魔法少女のプロかつ

「ビックリわってー、魔法出すときの呪文忘れちゃったんだもん。それ
にプロじゃなーい」

ふーっと頬をふくらますそこついで

「……旧魔法少女さん。呪文は、『ぼよよん、ぼこぼこ、ぼん』な
のです。

ちゃんと取り扱い説明書の十二ページに載つてゐます。予習し
とかなこと、めりですよ。」

若干、呆れた口調の口ロナが言った。

つーか取説なんてモンがあるのかい。

「あ。そういう、それそれ！ ありがとうアイスウォーターちゃん」

「お礼はいいので。呪文で口ロナに攻撃お願いします。
ちょっと田魔法少女さんがどれくらい魔力あるのか確かめてみたいので」

「うん、いいよ。でもちょっと、休憩ね。疲れちゃった」

「……肯定するです。口ロナも々々に羽を伸ばして背中が痛いので
す」

「にやはは、靈獸さんも大変なんだねー。

その羽かつくじーけど、肩こりちゃーいつかも」

「それもあるんですけど、鱗粉が多い田はかゆくてたまらないのが大
変です」

「ふえ～、やうなんだあ」

なんてほのぼのと談笑し始めたではないか。

「ハ、ここからには緊迫感つてモンが足りねエ。

つかあああ！ 魔法少女つてヤツア、こんなふうにいのかよ……。

+

+

+

数分後。

「あのよお、おめえさん方、こつまでダベつてゐつもりだい？」

痺れを切らし、ため息がてら言つてゐる。

すると、「口ナガハツとした様子で、

「し、しまつたです。危うく癡柔をねぢりつていらひでした。旧魔法少女さんおそるべし。

わあ、休憩終わりです。はやく魔法ビーンと来いですー。」

立ち上がり、憤然と両手を広げるチビチビ助に、

「え……！」

立ち上がり、悄然と杖を構えるチビ助。

足元に小ちめの黒い魔法陣が浮かび上がった。

「よしよし、マトモな魔法が間近で見られるな。

彼女は一つ深呼吸をした後、

「まお～よよん、まこまこー、まんつー、りこりこ、『ライアーン

グ』！」

振った杖から、やる気のかなからも感じられない電撃がちゅうりと
出た。

そいつは「ロナを避けるように身をへねりせぬ」と、まか空の向
いに消えてしまった。

なんなんスか今の。

「なーんでイなんでイ、登場は派手なクセに魔法はからひきこ、

俺が言つ終えるよりも前、「

「…………。それ、本気なのですか？」

苛立ちの混じつた声に遮られた。

「ロナは両手を広げたまま、キツヒカリを睨みつけていた。
あのトロンとした目ではない。

なんか知らんが、口を出せる雰囲気じやなひとつだ。

「いやせは。」めんね、あのがボクの本気なんだよう。
まだこの二つの全然慣れてなくつて」

笑いながら頭をかくゆつなこ、

「そんなウソで騙されないです。貴女の素質からして、あんな魔法
。

「ロナをバカにしてるとしか思えません」

「…………ううん、バカにしてなんかないよ。

「ひーとキミは靈獸なんだから、ボクが本気で靈を出してもくつち
やいだつたと思つ」

でも、と付け足してやつなは微笑んだ。

「痛いよね。こへら靈獸さんは丈夫だつて言つても」

「…………え？」

口口ナの服にこいた砂埃を優しくポンポンと手で落しながら、

「えつきね、お話してて思つたんだ。どうして戦わなきゃいけない
んだり、
こんなに樂しへお喋りが出来るんだも、やつとすへん艮くな
れるのになつて。
クーケンから、靈獸なんだつても怖いモノだつて教わつた
んだけど……。

「やつは思えなかつたの、少なくともキミはせぬ

それじゃあ、あのカミナリは傷つくなつたためにワザと外したつて
わけだつたのか。

「田魔法少女や……」

せうちくと、俯いてしまった。

おやおや 仕方ねえな。

よつやく腰も落ち着いた俺は立ち上がり、

「ま。ま。靈獸だの厄災だのつても、姿が姿だからなア。
俺様だって、こんなちんちくりんに魔法ぶつ放したくなーし。氣
が引けるつてそりゃ」

「ロナの頭をペシペシ呪わながり囁いてやる。

「は、パパさん……」

「えへへ。しゃつかんのまへじおつ、まへじからまへこの
もあるかも。
あと……それとなんだか、キラが無理をしてるよつな『氣』がしたの

無理ひじ、びひこひいた?

俺が訊くと、やつなまつーと考える素振りをみせて、

「なんてこいつのかな。あ。

上手く言えないけど、ほんとにアイスウォーターちゃんはボクと戦いたいのかなあって」

ふうむ。

確かに、なんとなくモヤモヤするから、で宣戦布告はオカシイよな。

それに死んじゃってくださいって言つたワリには、戦わずによくわからん行動ばかりとつていたし。

「ひ、否定です。考えすぎなのです。

……口口ナは、ただ旧魔法少女さんの力がどれだけあるのか確かめたかったのです。

確かめたらすぐにでも貴女を倒すです

だとよ。

さて、どうするチビ助。

「そつか。でも、ボクはキミに魔法うちたくないし……。じゃ、こうしょーよー

これからボクが石を集めるときに一緒についてくるの。

近くで魔法を見ればボクの力を確かめられるんじゃないかな

「それって、旧魔法少女さんと契約しちゃってことですか？」

……否[定]です。ヤ、なのです」

「、ふいっとかっぽを向いてしまった。

だが、ゆりなは一ヶ口笑顔で首を振って、
「んーん。ボクじゃなくって新魔法少女さんの、しゃつかわんと、
だよつ」

杖で俺を指した。

「おーおー、人を杖で指してくれるなよ。お行儀が悪い……って、
えええつ！？」

「ビビビビビビビビ」と意味だ、そいつアー

俺が困惑して云ふと、コロナが「ひひに振り返つて、

「それなら肯定です。パパさんとなら喜んでするです。
ふつつかものですが、三口シクお願ひ致しますのです」

丁寧なお辞儀をぶちかましゃがつた。

いやいやいや、待て待て。

俺にだつて選ぶ権利つーもんが……いや、そうじやなくてだな。

むしろ、それ以前に魔法使いをやりたくなーんだつてエの。

「わーいつ、しゃつちゃん、わーい！ これで杖も靈獸さんもバッ
チリだね、ぶいっ！」

> 122694 — 1761 <

だね、つて言われましても。

「だからよォ、俺は……」

「パパさん。旧魔法少女さんに負けないよつて、ロロナと力を合わ
せて頑張るです。

えいえいおー、ぶいぶいっ」

「、こいつら、人の話を聞きやしねエ。

しかも一人してサインをかましやがつて。

それ、この世界で流行つてゐるのかよ。

……いやせや。しかしながら……。

……いよいよマズいかもしれないな、このままだと……。

第八石・魔法少女なんて絶対になりたくない！

今晩はゆりなの家に泊めてもらひついた。

つづーか、帰る家はあれども帰り方がわからねからな。
しばらくは厄介になるしかあるめ……チビ助の家の人が承諾してくれれば話だけれども。

「ふあー……。もうお日様沈んじゃいそだね。
今日はまじつぱこ歩き回つて疲れちやつた」

「へへ。甘こぜ、ほに子。これからま、もつと動き回つてもいい」とになるからな。

覚悟しておくんだぜ」

「おひけー。ビーンといーー！ だよつ」

なんていう話をしている黒猫とゆりなの後ろに、両手を後ろ頭に組んでの俺。

そして、その後ろには、

「パパさん。口口ナも何かパパさんとお話をしたいのです」

「……」

「あ、あんなどこにFIFOが！　パパさん、FIFO。未確認飛行物体なのです。

パパさん知つてましたか、FIFOの略は『つりセー！？　フライング……お盆？』なんです」

「……」

「間違えたです。せつせん飛んでたのはペヤングのほうでした。
かやくを麺の下にしてお湯を入れると、かやくが蓋につかなくて
美味しいアレです」

よちよち着いてきながら一人盛り上がつてゐる園田。

やれやれだな。

「のガキンちよと俺様が契約ねエ……子守の間違いじやあねえのか。

ほとほと頭がイテハゼ。

「否定。まだ正式な契約は結ばれてないので、パパさんはただいま不完全な魔法少女です。

でも、簡単なんです。ちょっと呪文を呴えて頂ければ、すぐここでも口ロナはパパさんのものなのです。

あ、どうせなら今歩きながら済ませちゃうわ。えりと

なんだ、ここひとつ契約を結ばない限り、俺は魔法使いじゃあないつてことか。

……そこはア、呪ことをやったぜ。

「じゃあ、ポケットから何か（ちょっと呪文が書かれたメモだらう）を取り出やつとしたそこは、

「わからんつ、魔法少女なんて誰がやるかってんでえー！

耳の穴かつぽじつて良く聞きなア。

はつきり言ひやが、俺はおめえさんと契約する気なんぞ微塵もア
やしねやー。

やいとこいの面つぶつになもんべーつ、よしなにー！

♪♪♪んだ俺に、口ロナはしづんと肩を落としちゃった。

じめとまつこしてくる燐は若干だが言い過めた感が否めないが、い

やはや。

だつて、やりたくないものやつたくないんだからや。

……しうがねえじやん。

しづらへ歩くと、やがてゆつの家の前に到着した。

「えへへ。ほいじゃあ、しゃつちやん、アイスウォーターちゃん。ちよつち待つてね。

お姉ちやんに、お泊り会しても大丈夫か訊いてみるか?……うわーいっ!」

そう言つて元氣に家の中へ突撃していくチビ助。

お泊り会つーか、一口だけじゃあこわせかに困るんだが。

明日にでも元の世界に戻れる方法が見つかれば話は別だけれどもよオ……。

俺だつて別に好きで居候したいワケじやねエし。

ん?

お姉ちやんつて、フツーにこいつ事は母親か父親に了承を得るもんじやないのか?

首をかしげていると、急に扉がバンッと開いて、

「あらあら、まあまあ！ なんて可愛いやつ、お友達なのでしょう…
つー

天使さんたちなのですから、欣喜雀躍ですわー。」

何とも大ききな人が出てきた。

セーラー服の上にエプロン、片手にはお玉といった姿の女性。

背格好や服を見るに、おそらく高校生くらいだらう。

ゆりなと同じ長い黒髪を後ろで縛つておひ、耳はパツチリとしていて大きい。

大きいといえば、胸がすさまじい迫力だ。

ははは……俺らとは雲泥の差だね、こいつや。

「お姉ちゃん、この子がシャクヤクちゃん。ボクはしゃつちゃんつて呼んでるの。」

今日泊まつてもこーよね

「えーと、はじめまして、シャクヤクといいます。恐縮ですが今日一日どうか……」

「あらあらっ！ 白くて小っぢやくで、ふわふわな柔らかい髪が可愛らしくですっ！」

「あらあらっ！ 白くて小っぢやくで、ふわふわな柔らかい髪が可愛らしくですっ！」

頭を撫でながら言った。

「了承はま」とこ有難い話だが、ちよことばかう苦しぜ田那ア…
…息ができね。」

「わーい！ でね、」の子が口口ナカヒヤン。小っぢやこナビとつて
もじっかりしたお利口さんなのつ。

「今日泊まつてもいいよな」

「あ。口、口口ナと申つまうのや。よよよ、ようじ……」

お姉さんとは、パツと俺から離れるとい

「まあああっ！ もつと少しあくび、まよまよな柔らかまづが
可愛らしくですっ！」

「あらあらっ、承諾なのですっ！」

今度は口口美に抱きついて、頬を指でつんつん突きまくつはじめた。

「わーーー！ あ、あとつこでこ。」の猫ひやんは段ボールで捨てられてたから捨つたの。

今日から飼つてもいいよね」

おいおい、おめかさん捨て猫扱いされてんぜ？

俺がクロエに耳打ちをすると、一瞬だがこちらを睨みつけ、

「にや、にやあーん

ただの猫に徹した。

お姉さんの足にすり寄りながら、必死に口口、口口と喉を鳴らしている。

ああ、そうか。彼女は一般人だから喋つて姿をバラしたらまずいつてワケか。

だが、いくらなんでも。友達を泊まらせると、猫を飼つとのことで話が別だらうに。

そう簡単に了承なんて

「承允なのでつづ！」

つて、オイイイ！

彼女はそれだけ言うと、クロエを抱き上げ、子供をあやすかのようにゆらゆらと揺らし始めた。

なんとも、まあ……なぜ早々に寝かしつける作業に入つたのか。

よくわからんが、一つ言へるにとまゝ、この姉にしてこの妹あつてところだな。

肩をすくめて、ついコロナと顔を見合わせてしまった。

「パ、パパさん。口口ナはびつくりなんです。ほつペがへつこんで戻つてこないので」

うるうると涙目のコロナに、

「……俺も。皿廻の髪が世紀末だぜ」

何故かモヒカンヘアになつてこる髪を戻しながらの俺。

しかたあるめえ、これも宿代と思ひね。

「」やはは、やつたね二人ともつー。わざ、ボクの部屋に直行つ

ゆりなが、げんなり表情の俺たちを家に押し込みつつ、

「うわーいー。お姉ちゃんありがとー、だーい好きつー。」

と、言った。

そしてそのまま後ろへ

「お姉ちゃんもなのですよー。あ、ゆりちゃん。お部屋に行く前にひちゃんと手を洗つてくださーねー」

そう、のんびり口調で返つてきた。

+++

「だーつ、疲れたあ」

「だーつ、疲れたんですね」

部屋に着くなり、ベッドに寄りかかって俺とコロナが盛大なため息をついた。

もううん、手せりやんと洗つてきたぜ。

よくわからん『パンシパン』の歌なんてもんを歌わせながらな。

「ふえ？ しゃりやん達、せりあまで元気だつたのこ、ビーしたの？」

「せりあまでは、な

めつの頭上に浮かんだハテナマークを手でかき消しつつ、

「ここのかよ、こんな簡単に承諾して。俺たちもそつだけど、クロ

Hの件とかや。

お姉さんお人好しそうやしねHか?」

「でも、あの方のおかげで口口ナたけは屋根のあるお家でグッスリ眠れるのです。

感謝感謝なんです

そりゃあ、そーだけれどもよオ……。

いつもみんな調子なのがい?

「うん、お姉ちゃんはいつも誰にでもみんな感じで、とーつても優しいの。

ボクの血縁のお姉ちゃんなんだよ。はーいー

なんて周りに花を咲かしている。

「ふうん、羨ましい」って。俺は一人っ子だからよ。あ、一応お父さんやお母さん改成て了承を得たほうがいいかもな。

せっぱり一家の長が知らねHつてのはマズイと想つじゃな

ねつ言つと、一拍置いてゆりなが力なく笑った。

「……」やまは。ウチ、お父さんもお母さんもいない。
今はボクとお姉ちゃんの二人暮らしなんだ。だから一人とも伸び
伸び過ぎ」してもらつてへー キだよ」

「あ……。す、すまねえ。余計な」と言ひまつて

頭を下げる

「う、ううん！ いないつて言つても、お仕事の都合で海外に行つ
てるだけだから」。

「ごめんね、しゃつちゃん。へんな心配をせつやつて。あはははつ
とは言ひなれども、寂しいのには変わりないだらつ」。

どちらか片方ではなく、両親そろつて海外なんてな。いったい、
どんな仕事なのだろうか。

だが、ゆりながあまりにもカラカラと笑うモンだから、

「やつか。わらい、わらい

俺もつられて一緒に笑つてしまつた。

すると、クロナが笑いあう俺たちを不思議つつ交叉に見て、

「一人とも、何を謝つてゐのですか。楽しそうです、クロナも『めんね』『シ』『シ』みたいのです」

なんて言つもんだから、またおかしくなつて一人で笑つてしまつた。

+

+

+

「……おめえら、楽しそうだな。オレがひどい目に合つてゐるつーのによお。

つたぐ、あの嬢ちゃん加減つてもんを知らねーのか

部屋に転がり込んでくるや否や、開口一番グチを放つ黒猫。

「加減つて、何かあつたのですか。お姉ちゃん」

クロナが訊くと、クロエは氣だるみつに肉球で自分の肩をポンポンと叩きながら、

「おう、口助。よくぞきいてくれた。あの後、何十もの子守唄を歌いやがったんだぜ。」

歌いやがつたんだせ

それも近所に聞こえるバカデかい声ですよ……恥ずかしいつたら
ありやしねー。

「かとら睡眠通り越して永眠する寸前だった。」
おめえ

俺とゆりなの驚愕顔に気づいたのかクロエはびくつと毛を逆立てて、

「あ、あんだよ、そのシリは」

「だつて、ねえ。しゃつちゃん聞いたよね？」

ゆりながひきつった顔で俺に振る。

「……ああ、聞いたぜエ。しかと聞いたぜエ～」

۷۰

口美は先ほど確かに「トシの」とを『お姉ちゃん』と呼んだ。

腕を組み、うんうんと頷いて俺はいつ止めた。

「クロエ、おめえさんつて野郎は……まさかメス猫だつたとはなア！
へそが茶を沸かすとま、まさにここの事よオ」

続いてゆりなも、

「クーちゃん、かわいーつ！ メスだつたんだあ。
わーい、メス猫メス猫ー！ メス猫クーちゃんつ」

やうはしゃべ俺りに、

「こやあああ！ メス猫つて言つなあああ！

侮辱の言葉だべ、てめーら無邪氣にも「ノノヤロー」

いやはや、言動があまりにも荒々しいもんじ。

まさか、メスだつたとはな……これかに信じられねえぜ。

「だから、確かめる必要があるつてなもんで」

言つて、グイッとばっかしクロエの足を広げた俺に、

「ほ、バカっ！　あにすんだよつー。」

すかさず肉球フックが飛んできた。

「いっひっひ。てめえだつて、せんざん俺の事からかいつてくれただ
る。

そのお返しつてだけの話や」

頬を赤くながら言つてやつたが、どうせひマジハシにな。

「の反応　ま、別に本心としつやあひつやでもこことなんだ
が。

「うん、どっちでもクーちゃんはクーちゃんだもんね。
あはは、でもなんだか可愛いかも。女の子なのに『オレ』だなん
てつ

ゆつながクロトを高く高くしながら言つて、

「可愛いかあ？　女ならせめて女ひつべ。
もつと、可愛いのある言葉づかひこした方がいいぜ、これをかこ
よお」

持ち上げられた黒猫の喉をポリポリかきながら俺が続ける。

対して黒猫は、『けつー』と尻尾をあつたてて、

「おめーらだけには、せつてえええ言わたくねえセリフ！」

と、怒鳴った。

……そりゃまあ、いもつともで。

第九石・お風呂は命のことや

「さあ、お風呂の間、くつろごだ後、

「あ、そーだ。今日はお姉ちゃんがご飯の当番だから出来上がるのに少し時間がかかるかも。

その前にお風呂入っちゃわない?」

ゆうなの提案に否定するものなじめりず、みんな一様に首を縦に振る。

「へへへ、今日は飛びまくって汗だくだからなあ。
とつとつ、やつぱりしてえーぜ」

「肯定。ロロナも汗かこちやつたのです。ベトベトなんです

俺も一匹の靈獸に続いて、

「お、いいね。風呂は命の洗濯つて言つしな。
俺も入らせてもらひますよ、慎ましくね」

さて、ここで問題になるのは誰が一番風呂を獲得するのか、である。

まあ。ソレはやはり、主であるゆりなで決まりだらうな。

となると、一番手は誰が入るのかといつて話になるのだが。

「お風呂だお風呂だ、わーー！ みんなで一緒にお風呂だ、わーい
っ！」

ん？

ベッドの上でぴょんぴょん跳ねるゆりなを見上げて、

「うょい待ち。みんなで一緒に、さうこうした。銭湯にでも赴くつゝことか
イ？」

そんな俺の質問に、

「んーん。

ボクとクーカヤんとこやつちやんとアイスウォーターちやんの四
人でウチのお風呂入るの」

あつけらかんと答えるチビ助。

「いやいやいや、忘れてくれるなよ。俺は男だぜ！
姿はこんなチンチクリンになつちまつたけど、中身は超が付くほ
ど男なんだつてーの」

「ふえ？ 知つてるけど、それがどーしたの？」

そ、それがどうしたのときたもんだ……。

「いつはア、手」わい。

「え、えーどだな。つまりこのの…… そうだ、俺は他人と一緒に
風呂入るのが苦手なんだよー」

なんつーか、いつぱずかしくてよオ」

「ふーん？ ボクは全然恥ずかしくないけどなあ」

まだ小学生だとはいえ、ちつたあ恥ずかしがつてくれよ。

それに四人でなんて窮屈だらつ、ゆつくり疲れもとれないぜと付
け足すと、

「それモモーだね、ボクん家のね風呂あるとまつ広くなー。」
「ははー。」

「いやあ、井二つたまこつたと笑ひやつたな。

「それじやあ、わつ迷こいと迷ひからひやつてから入りてき

ホツと風をつくる海に、

「てこいよ」

「え、俺からでここのか?」

「うそ、だつて今口はじまひん感謝モードもんー。」

なんだよーの、ハヤシハヤコトモーは。

クスッと笑つた俺に、

「えへへ。氣にしないでいこよ、ボクとクーちゃんは後から入るか
観たにテレビあるし……ねー、クーちゃん?」
「うー。」

ルの頭上の黒猫に確認をとるやつだ。

黒猫は、おべびをしつつ「氣だるマ」と、

「……ああ、ルルル。オレ達は観たいトレーニングがあるからよ。お入り入つてきな」

「なんとなげだが、クロエは反対すると思つたんだけどな。そんなに面白い番組をやつてるのか？」

「この世界のトレーニング……どんなものなのか、いたわかに観てみたい気もするが、いやほ。せ」

「ルルは有難く一一番風呂をいただからせてもいい」と、ルル。

「えじや、お風呂に甘えて入つてくへつてく」

「うふふー、お風呂は階段を下つてすぐ左だよ。わからなかつたらお姉ちゃんに訊いてね。バスタオルとお着替えはちよつとじてからボクが持つていいくから」

何から何までわづいなど無いと、やつなせーっ口に笑顔で「サイ

ンを繰り出した。

+++

脱衣所に着いた俺は、服を脱ぎつつ、

「ちつ、使いづれえ体だぜ、まったくもつてよオ」

改めて自分の変わりすぎた姿に嘆息した。

筋肉皆無な白く細い足はフランフランめし、手はまっつんとをイマイチきいてくれない。

「マイチつてどんな感じかって？」

グーとパーを繰り返し出してみるが、頭に描くスピードと反応が大きく違う。

気持ちだけが先に行つて、体が追いついてこないって感じかねえ。

やつこやコロ美のヤツも似たよつなこと言つてたっけか。

まつこと出た腹をベシベシ叩きながら、

「あーあ、俺様の美しく割れた腹筋が跡形も無い……。

」こんな体、とつととオサラバしてーぜ。だりにいつたりありやしね

「H

風呂の戸を開くと、けつこう大きめな浴槽が目に入った。

「ほー。いつや、また中々に。俺ん家の風呂よりデカくてキレイだな」

とつあえずサクッと体を洗つて湯船につかる。

^ . 2 2 5 7 4 3 — 1 7 6 1 ^

「 いつやあ、イイ湯だせH…………」

最初は他人の風呂を使うなんて、と気が引けたが、入つてしまえば遠慮よりも快樂が勝つていた。

「しみじみ飲めば~と、くつやあ」

そう俺が気持ちよく歌い出したときだ、

「それ以上は歌つひや、『メジ』なのです」

ジーツと風田の『から顔だけ出して言に放つオリーブグリーンの
ジーサイドアップ。

「なーにしてんだア？ そんなどひひど

「…………」

無言。

その瞳からなんだかキラキラな星が飛んできたりもしていたが、
そいつを全て鼻息で打ち落とし、

「あいわかった。歌わないから、早く出て行っておくれ

「…………」

それでも無言のまま意味ありげな視線を送つてくる。

「ほれほれ。もう用は済んだんだな？ あつち行つた、しつこ

俺がからかい氣味に呟つと、そこいつはあからさまに血を落とした。

「……肯定です」

戸が閉まつた。

が、いつすらと「ガラス」を通して口ロナの影が見える。

しょんぼりと座つちまつて、あ。

「つやまた、まつたぐ。わかりやすいチビチビ助だ。

「おーい、口ロ美。一緒に入りてーなら、素直にそつとつたひびつ
なんでえー」

俺が呼びかけると、待つてましたといわんばかりに戸が開いて、

「やつぱり、パパさんは優しいのです。口口ナはもうすでに準備開始してました。ほどきほどき」

髪を解きながら、クール面の園児が現れた。

へえへえ、そりやビーも。

苦笑しつつ俺が頭に乗せたタオルを絞つていると、そいつが浴槽に入つてこようとした。

「おーおー、おめえさん。ちゃんと体を洗つてから浴槽につかりなア」

よじ登つててくる口口ナの頭を押さえつけながら言つて、そいつはぶーっと頬を膨らませて、

「はやく一緒に入りたいのです。体は後から洗うです」

「それは否定、つてやつだ。浴槽は家族みんなで使うんだからなるべくキレイな状態で次の人に回してやらなきゃいけねえ。まあ、親父の受け売りだけだ。」

それ元、 ここは風呂を借りてゐる身だし、 尚更だらう。

びつへこじたまつに俺を見る口口ナに言葉を続ける。

「それがイヤなら、 一緒に入るのはナシだ。 さてさて、 どうする?」

意地悪くニヤニヤと笑つてやる。

すると、 やいつばぶんぶんと首を横に振つて、

「……やだ、 パパさんと一緒に入るです。 ソッパーで洗つんです」

「いっひっひ。 良い子だ」

せかせかと夢中で洗う小さな背中を見ながら俺は思つ。

こんな子供が『靈獸』だなんて厳かな名前を抱いて。

まだまだ甘えたい盛りのただのガキンちゃんに見えるが……。

そして。

湯船に映る見慣れない少女の顔に、

「おめえさんは魔法使いだつて、ぞ」

小さく呟いて、俺は水面を指で弾いた。

第十石・魔法少女の取扱説明書？

「ふああ～。疲れた体に染み渡るんですけど、これがまた」

湯に浸かったロロナが年齢のような声をあげる。

「おめでたさ。ここへこんだけれども、なんで俺の上に座つてしまふんで。」

「れじやあ足を伸ばしてくつろげねえ」

「おめでたさ。ここへこんだけれども、なんで俺の上に座つてしまふんで。あぐらをかいだ俺の足の上に、ちょっと正面座をしてこらへつてくつろぐ」

「そのまま座つちつと溺れちつことです。結構いいお風呂深いのです」

「なら、立つたまま入りね」

「否定なんです。それだと、おつぶつにならないです」

「おー。今まここ俺がくつねばらない状態なんだが。

「……じゃあ、飛びやがれ。羽出したて、ひこつじがつかり浮きながら漫かりやあいー」

「それは名案なんです。でも羽を出すときは『うそしづ』って何を出すので、もしかしたらちよつだけ出せや、」

言ごかけたところで口口美をひょこつと抱き上げ、

「わーった、わーったって。きたねー。俺の上に座つてもいいから、くれぐれもふんばりねエでおくれ」

「肯定。……えへへ」

嬉しそうに人の足の上にまじやがつて、このチビチビ助め。

わざと、ああこいつと聞こせがつたな。

こやはせない。これじゃあ疲れが取れるだけいか、増してしまつ。

次は絶対一人で入るつ、変なオプションは抜きだ そんなことを考えていると、

「パパさん。つまんなそつです」

悲しそうな顔で俺を見上げながら、

「口口ナと入るの、楽しくないですか？」

一瞬ぎくへつとしながら、「これはハッキリと書いてやつた方がお互いの為だわいわ。

「つまりつまらないで言えば、つまらないかもねえ。

あーあ、出来れば一人でゆつくりノンビリと漫かりたかったぜ」

まあこんな感じか。

ちと、厳しく言い過ぎたか？

チラリと横田でチビチビ助を見やるが、そいつはあつらかんとした様子で、

「それなら暇つぶしになるもの出すんです」

湯船から左手を突き出し、指パツチン。

すると、ポンッといつ音と共に矢張り甲子のよいなものが出てきた。

黒い表紙に、青の螢光色で『式式所有者専用』と書かれていた。

「あんだア？ ゲームか何かの説明書みたいだが」

不思議がる俺に、

「これは魔法少女の取扱説明書なんです。
いざれ成る魔法使いの予習がてら、暇つぶしに最適だと思つたのでじ用意したのです」

ああ、これがあのとき書っていた取説か。

結構薄つぺらいんだな……分厚くても困るが。

「ま、やるつもつはねーけれども、暇つぶしに読んでみるとするか

ね。」

ええと、なになに」

それには七つの項目があり、それぞれ「こんなこと」が書かれていた。

其の壱 精霊石について

精霊は呼べばいつでもどこでも飛んできます。

式杖における封印解除の呪文は『イグリネイション』です。

其の弐 魔法使用について

式杖所有者の魔法を使うときの呪文は、

『ふゆゆんふゆん ふいふいふい』となります。

慣れれば簡略化することもできますが、最初の「ひまなむべく全て唱えましょう」。

其の参 使用限界について

精霊の中に入っている精薬といつ液体がなくなると魔法が使えなくなります。

もし使用中になくなつた場合は海に戻すか、使用者の心身を休ませてください。

なお、なくなつたままの状態でも魔法は使えますが、生命エネルギーを著しく消費しますのでオススメできません。

其の肆 魔宝石について

魔宝石には一通りあります。

強力な七つの大魔宝石とイミテーションと呼ばれるたくさんの模造魔宝石です。

其の伍 禁止魔宝石について

七大、模造問わずどれも魔宝石には様々な能力が秘められていますが、

中には絶対に使つてはならない禁断の魔宝石もあります。例として治癒系の魔宝石は全て禁止魔宝石にあたります。

其の陸 注意事項について

他人に正体を知られてはいけません。（ただし魔法関係者を除く）魔法使いであるということをバレないように周りに注意して魔法を使つてください。

其の漆 集束について

「……ん？」

そこまで読み進めて俺は頭を傾げた。

其の漆（読みねエ）という項目が、説明が無くまつたくの白紙だつたからだ。

「おい、ロロ美。ここの何も書かれてないんだが。どうなつてやがるんでい？」

両手で湯をすくつてひたすら俺の鎖骨にぶつけるといつ、謎の一人遊びを楽しんでいるロロナに訊ねてみると、

「それはまだナイショなんです。ここの口か文字が浮き上がつてくると想うんです」

「あーやっぱ。ま、別にどーでもいいけれどもよ……つとー。」

とつあえず反撃に、手で水鉄砲よろしくお湯を飛ばしてやる。

「わっぷ。鼻に入ったです、ツーンと痛いんですよ」

「こひひひ。わまあみそひじど」

と言いつつ、湯船からあがり髪を洗つ作業にとりかかるが、……ど

「もあの説明書が引っかかるワケで。

説明はからつきし頭に入つてないからビリでもいいのだが、それ
よりも『説明書』 자체がいたさかにね。

確か、ピースが保管していたパンダラの箱が手違いでゆりなのも
とに送られたんだっけか？

んで、それを開け、中の宝石を飛ばしきつたゆりながそれを集
めるにになった 魔法使いになつて。

つまりそれは偶然の事故つてこつた。それなのに、説明書つて。
フツーそんなもん無いだろ？

用意が良すぎゆつづか、これではまるで

「パパさんの考えてる」と面白いこと

シャンプーをシャワード流しつつ見上げると、口ロナが無表情で
俺を見下ろしていた。

「面白こつづいてこひつて。つーか、あんまし俺の心を読んで
くれるなよ。
これかに困るぜ」

もうリンクスのボトルに手をかけた瞬間、

「……パパさん、一ついいですか」

また声色が変わりやがった。

もしかしたらあの時のように田も光つてゐるかもしけないが、無言でリンスをひねりだす。

見ていて気分のいいツラじゃねえし。

「あまり深く考えないほうがいいです。

パパさんは、旧魔法少女さんと一緒に散らばつた石をただ回収する、

ただそれだけのお話なんです

リンスを前髪にちまちま塗りこみながら、

「……恐縮だけれども、俺をそんなに買いかぶつてくれるなよ。別になんにも考えてなければ、宝石集め云々も興味ない」

本音だ。

魔法少女？ 誰がそんなモンをやるかって。素質があるか知らねエが、俺じゃなくてもいいだろ。

セツ、ここついたの仲良じいさんとおれが「ラメンだ。こいつでもペーチクやってられね。

俺は明日にでも元の世界に帰る方法を見つけて、ひとりじりの世界からトンズラを決め込む。

テメヒラの世界はテメヒラでなんとかしゃがれ、つてヤツ。

「果たして、やつ上手く逃げられるですかね」

「ロナがくすくすと笑いやがる。

「こつ、田がピカると性格ちょっと悪くなつてねーか?

これはこれは、修正したこと。ケツは昔こいつがいたいな。

「うるー。チビチビのクセに生意氣だつての。おもがが必要だね、まつたくもつて」

「立ち上がり、

「……ほくつ。」

「エクコしきるロロナを抱き上げても風呂椅子にストンと座ら
かる。

「覚悟しきってなもんで、一〇」

シャンプーを出して、わしゃわしゃと乱暴に髪を洗つてやる。

「わわ。パ、パパさん激しきです

「ほーれほれ」

「わやわややー、やじませ脇です。く、くすぐつたいんだよ」

ま。

所詮はガキンちょだと思いたいといひだが。

「こつらの動抜きに元とも、やせつどひとも不明瞭な点が多くある
な。

深く考えるな、とは簡単に言つてくれるが魔法使いになつてしまつ
たら深く考えるを得ないだらつよ。

だから、これ以上面倒なことになる前に本当に逃げ出すんだ。

明日が勝負だな。

第十一石：第六番模造魔宝石ホバー・ザ・ルヒエル編

「九十八、九十九……百、なんです。パパさん言えたですっ」

「よーし、HライHライ。んじや、そろそろあがるぜH」

そう風呂からあがった俺達の前に、

「むうー……」

現れたるは、ふくれつづらのゆりな。

そいつは抱えていたバスタオルを不機嫌そうにボフッと俺に渡して、

「しゃつちゃんさー、他人と一緒にお風呂入るのイヤなんじやなかつたのお？」

ジトつと見つめられ、いくらか気圧されたが俺は体を拭きながら「うづうづいた。

「あ、ああ。そりゃあ苦手だけれども。

「どうしたんだ？ 口ボロフスキーハムスターみたいに頬を膨らませちまつてさ！」

ゆりなのほっぺたを指でつぶつと突くと、そこには反抗的にますと膨らませつつ、

「だつてだつて！ アイスウォーターちゃんと一緒に入つてたじやん！」

ボクだって、しゃつちゃんと一緒に入りたかったのに……するこもん

これはこれは。何かと思つたら、そんなことか。

別に俺は一人で入るつもり満々だったワケなのだが。

ま。こりは一人、宿主のじ機嫌を伺つておくれといつするかね。

ぶいひとやつぽを向いてしまつたゆりなに、

「んな、怒るなつて。

……じゃあ、ほら。明日はおめえさんと一緒に入るつー。これでチヤラつて事でーつや！」

とかなんとかテキトーに言つておけばいいだひつ。

どうせ明日こな、この家から（とこづか）の世界から）出て行く
ワケだし。

すると、予想通りにそいつはケロッとした笑顔でこちらを向いて、

「わーいっ！ しゃつちゃんと一緒にお風呂ーー…」
絶対だよ、約束だもんね！」

そう言って、小指を突き出してきた。

「描きりげんまーん」

「いやまた、懐かしい一つか。そんなのやるの小学生のとき以来だぜ。」

つて、いまの俺はそんぐらいのガキんちよだつたか。

なら、ガキはガキらしく振舞おつじやあねエか。

「へいへい! わーつてるつて。
約束、な

俺も小指を出してゆうての指に絡める。

「指切りげんまん… ウソついたひ、」

流れのままフツーに針千本の一ます、と続けよひとしたのだが、

「雷千発ぶつぱなーす。はー、指切つた!」

「ちょ、ちょ、ちょい待てつて。切るな切るな。
針千本だつたらまだしも、雷千発つておめえわんが^{おひつ}と急に
アルすぎるとだが、おいー!」

せう燒てる俺に、ゆりなは八重歯をキリツと光らせ、意地悪やつ
に、

「「「やはあ？ どーして焼てるのかなあ。
しゃつちゃんが、ちゅーんと約束守つてくれればイイだけの話じ
やあん」

^_^30084-1761^

ウツと、たじろいだ俺に今度は後ろのチビチビ助が、

「あのですね、旧魔法少女わん。パパさんまたわお風呂でいひよ

んでたんですね。

ふははは！ 明日で世界からとんでもないバイバイするんだ
ゼ！

どわれが魔法使いなんてやるんだゼー あはよ、このペチャパイ
キングダムがアアアって。

一体、パパさんどうしちゃったのか……ロロナがビックリなん
です

お前が一体どうしたんだよ。

つーか、そんな怪しげな語尾つけた覚えねえぞ。

「ひつじーー！ しゃつぢゃんだってハイパーぺつたこじちゃん！」

ハイパーぺつたんじ。

そんな使い方されると、ハイパーも思ひもよらなかつたひつじ。

「いやはや。今の話のシシ「むべき所は胸の」とじゅあ無ことと思
うだけれども。

ていうかだな、口口美。おめえさん変な話しないでくれよな。誤
解しちまうだろ」

「ただけ言ひて、我関せぬとばかりに」ハシハシと、

ジジイの乾布摩擦よりしづく体を拭いてくる口口ナに苦笑を叫して
みるが、

「変な話もなこむ、ホントのことなんです。

パパさんは口口ナたちを見捨てて逃げる氣ままんだったのです」

「ち、ちにつじぱっかし言い方に刺々しそが感じられるのは氣のせ
いかね。

「えーっ…? しゃつちやん、靈鳴呼んだとき『魔法少女はじめま
した、春なので』とか、

『『口口ナ』は一つ、先輩のお手並み拝見つてことで』とか言つてたか
ら、やる氣あると思つてたのこつ」

「んな、四ヶ月も前の話を蒸し返されてもよオ

「今日のお話だもん!」

「大体わ、おめえらが口口美と俺を契約させんつんぬんで盛り上
がつてるとか、

ちやーんと俺は魔法使い自体をやりたくなえつて抗議してたんだ
ぞ」

「や、そんなの聞いてなかつたもん……。ふう、うう」

「つたく。まれほれ、若いのにやんな顔すんなつて。
脣間にシロを齧せる度に幸せが逃げかけまひつて親父が言つてたぜ」

グリグリとやつなの脣間に指をいりあつしやる。

「やんなのよつ、しゃつかやんが逃げかけや、うとの中しつが大問題だ
よつ」

幸せを、やんなのよつて言こ切つてしまつなんて。

なんてこつか、うつこつかうが子供だね、まつたく。

と、脣をすくめて苦笑して、いた俺に、

「幸せなんて、そなんので十分だもん。いらないもん。
しゃつかやんが一緒に脣てくれの方が絶対いいもん」

やつて、俯くチビ助。

「つやあ……[冗談を言つて逃れられた露困飯でもないか。

まあ、何故だか氣に入られて、いるよつて悪い氣はしないのだが、

だからとこつて付き合つ義理もない。

一曰や一曰の旅行とは違つんだ。

何が起るか分からぬ、いつ終わるかも分からぬ魔宝石集めなんや、正直やつてられん。

こつまでもこの世界にとどまつて、親父に心配かけたくね。じゅうのダチに余くなるものもキツイ。返してもうつてないゲームもあるじや。

やういやケンカでケリをつかねヤツもこ。 (ただいま四勝五敗)

負け越しのまま逃げたら、あのヤローになんて言われるか。

そんなことなで、俺もいたわかに仕事にワケで。

なーんて、ガキのこいつにまともペソといだりつや。

だから、俺は少々強引だが子供相手に納得させるためこはこれがベターだと思こ、こいつした。

「悪いけれども、俺にも色々事情があるんだつて。
おめえさん方が切羽詰つてゐつてのは、よくわかるけれどもよお……。

まあ、あんまり『つがママ』言わねでくれると助かるつてワケで

その瞬間だった。

あきらかにゆりなの動搖していく様が見て取れた。

「ワガママ　？」

瞳孔が開き、先ほどまでの元気ハツラツ少女とは思えないような無表情に変わっていく。

田の光がサッと消え、どこか遠くを見ながら、

「『めんなさい』……言わないから、もうボク、『ワガママ』言わないから」

「え？」

「ちゃんと良い子になるから、ボク、ワガママなこと言わないから。だから、だから、だから」

気が抜けたよつてペタンと座り込むゆりな。

「大丈夫か、どうか具合でも悪いのか？」

どうしたらいいのか狼狽している間にも、ゆりなの呼吸が荒くなつていく。

胸を押さえて咳き込む彼女に、何も出来ず呆然と立ちすくむ俺。

「けほっ。え、えへぐ。『めんね、しゃつちゃん。
ボクは、だ、大丈夫だから、先にお部屋戻つていいよ……けほ
つ、けほっ』」

「……パパさん。『口ナたちは大人しく立ち去るべきだと思つんで
す』」

「なん」と言つたつて、放つておけねえだろー。」

そう振り向いた俺の田の前に、どこか悲しげな表情をしたクロエ
が現れた。

「あーあ。アレを言つちまつたか。いつ出てもおかしくなかつたか
らな、しゃあねえか。

『口助の言つとおり、おめえらは部屋に戻つてな。あとはオレが
なんとかすつから』」

二つもの事だといつも軽い調子で言つた後、

「 シラガ娘。ポー子にもいつ『あの言葉』を言わねでやつてくれ。

すまねえ、ワケはいつかひやんと話すからさ……」

背を向けたまま、黒猫はそつ笑つた。

第十一話・ナマタ、乾かして

その後、ゆうなの部屋で髪を乾かす俺たち。

『やせなパンクのドライヤーを髪にあてつつ髪がべるい」といってみれば、やせながつわの事だ。

「ありやあ…… 一体、なんだつたんだ。おめえさん、なにか知ってるかい?」

伸びこ、俺の組んだあぐりの中へと陣取った口口美に訊いてみると、

「口口ナもわからなこんですね。お姉ちゃん『あの言葉』を言わなこでほしこって言つてたのです」

あの言葉。

『ねねおねいへ』『ワガママ』ここがコードで間違こないだひ。

俺が『ワガママを言つたか』、あんなつてつました。…と答えるのが妥当か。

だけれども、そんなどかだか言葉一つであれせばまでに辛めつて
咳き込むか？

「口ロナセアマリカマの仕組みとこいつ番組を行って観た」とあるの
です。

もしかしたら、その言葉がそれを

「刺激した、って？」

「こせこせ、まさか。まだ十にも満たない若者でそんなものあるはずも無い。」

フジーのビリビリでもこわいな子供で見えてるやつなり、「アマリカマ」だなんてそんなもの。

「パパさん、本当にそういう思ひてるんですか？
子供だから傷つかない」と、何を言われてもくーきだと、やつ思つてるのですか？」

ジッと見上げてくれる口ロナ。

む。

やけにつつかかつてくるじゅねーか。

「…………まだひつこじこねえ、何が言ひてよんだ」

「コロナは、旧魔法少女さんよりチビチビなんです。だけど、大人と一緒にちゃんと傷つくるのです。パパさんに契約断られて怒鳴られたときとか、パパさんにコロナと一緒に風呂まらないなこつて言われたときとか……ちやっかりと傷ついてるんです」

げつ。

何食わぬ顔しているから平気なんだろうと想っていたのだが、マジでか。

「マジなんだ

ありや、やあ。

なんて返していいものやう、ドライヤーの風を冷風に切り替えたながら、そう考えあぐねてみると、

「でも、コロナは傷ついてもすぐ治るんです」

「せつせつ、じつじつしていい？」

といふ質問に一瞬だけ俯いたあと、

「それは。

パパさんが、その後すぐに優しくしてくれるから、なんですか？」

そう頬を染めて俺のパジャマをぎゅっと握った。

「あんただせりやあーーーははー、わけわからぬーヤツ」

ふっと吹き出した俺に、口口美は珍しく怒った表情で、

「む。む。口口ナは真面目なお話をしてくれるんです。
つまり、口口ナが言いたいことは、傷ついても癒してくれる人が
いればいいと想つのです」

「ふうん。そういうモンかね？」

「マイチよくわかつてしませんといった俺の流し的なリアクション
を不服そう、元気

「あのですね。パパさんはやつを、

旧魔法少女さんがフツーのおバカそうな子供だから傷つかないって言つてましたよね

いや、おバカそうなとまでは言つてねだけじゃ。

「でも、逆に子供だからこそ傷つくなつたのがトライウマたる原因だとしたら？」

そして、もしあの人が『いわゆる』へ一般の普通の子供『じゃな

いとしたら？』

「……さてはて。言つてゐる意味がよくわからね工なあ

「パパさんなら分かるハズ　「つさ、あつともつともへ氣付いてるハズなんです。

彼女の心の傷に、そして彼女と自分とのある共通点に」

へえ、これはこれは。

人の心の中に土足で踏み入ることのできる、スンバラシイ能力の持ち主なだけある。

「いやほや。それは俺の心中を覗き見たから、だからそう断言できるってワケかイ？」

少々ねじけて重つてゐるが、

「パパさんの言葉を借りると、コロナの能力をそこまで買いかぶつて欲しくないんです。

少しだけ、ハハさんだけの考え方が読み取れると、少しだけ、その奥底までは届かないのです」

「だったら、どうして俺の全てを知ったかのようだ。」

訊こうとしたが、俺はすぐさま口を噤んだ。

何故なら、コロナがあの光つた眼で、ニイッと不気味に笑いながら俺を見上げたからだ。

「それは、ピース様の選んだ『「ドモ』だから、なんです」

「肯定。つまり、それはですね」

スッと息を吸つて言葉をためる口ロナ。

「ぐりと喉が鳴る。

……ピースか。あの唯一にして最強の魔女だとかいふらざけた婆さんが選んだ子供。

俺は当然として、やはりゆりなも故意に選ばれた子供 そういう事なのか？

いよいよキナ臭い話になつてきたもんだ。

そう、神妙な顔をして待つていると、

「くつくちー……なんです」

ガクツ。

なんとも間抜けなクシャミに一気に脱力してしまつ俺。

「あらり、鼻水出でんぞ」

「あ、う」

鼻水をズルズルとすすりとしたそいつに、

「115°。ちやんと鼻をかまなこと中耳炎つひ、こわい病氣にな
つちまうんだぜ」

ティッシュを三枚取り出して鼻にあていやる。

「せり、チーン」

「ちーん」

「ん。キレイキレイなつた……つて、つまりそれはベックチなんで
すつづーのは、
どうこいつ意味なんでえい「口口美イイイー！」

「うがーつとす！」ただ俺に、口口ナは鼻を真つ赤にして、

「1」めんなさいです。今のクシャミで何言つか忘れちゃつたんです。
えつと。パパさん、口口ナの髪も乾かして欲しいのです。風邪ひ
ましたなんです、しゃせか！」

「つたぐ、興醒めたア」のことだな。あと、さつさに俺の口癖マネしててくれるなよ」

「おひこー。恐縮なんです」

「……口口美、おめえワザとか？」

「ぶいっ」

いや、じつじてやうでブライサインが出るんだよ。

ホント意味不明なガキンちよだ。もしかすると、今時の幼稚園児はみんなこんな感じなのか？

だとしたら全国の保母さんこ回讀しちまつぜ……。

そう頭の中で嘆いてると、またもや口口ナが大きなクシヤミをかました。

「あー、もう。しゃあねえなあ。俺様が乾かしてやんよ。チツ、めんどくせエめんどくせエ」

「やたっ」

「前向けー、前」

「肯定なんですよ。」

と、前を向いたはいいが、ぴょんぴょんと跳ねるもんだから
たまらない。

「はしゃぐなつて」

「ライヤーをオンにしながら、

「ほひ、ジッとしたなア。動くとヤケドすんや。つーか、靈獸サマ
とやひも風邪をひくモンなのか?」

カラダ丈夫なんだよな、確か。

クロト曰く、ちよつとやせつとのじゅやあケガしないとか言つ
てたよーな。

「肯定。ケガはしつもすぐカーパーに治るんです。でも病氣は
普通にしちゃうのです」

「あーんわ、カーパーはスか。お姉さん不気味な体してるんスね」

「はー。不気味な体なんですか」

そんな美容院のようなヘンテコな会話をじつひ、口ロナの髪を乾

かしていると、

後ろのドアがカチャッと開いた。

「ん？」

振り向くと、まだ周囲に湯気を立ち昇らせているゆりながソーッと顔を覗かせていた。

「お、ゆりな。早いねエ、もつあがったのかい」

「うん、と笑顔で返されるものだとばかり思っていたのだが、しばしの沈黙のあと、し

「……あ」

と言つて後ずさり、そして、

「うーっ」

と目に涙を浮かべてバタンと扉を閉めた。

「さあ、どうしたんだ？」と首を傾げて、俺に向かって尋ねる。

「さういふと、パパさんとどう顔をあわせていいのかわからなくて困つてるんです」

「なるほど。別に、気にしちゃあいねーのに。
いや。あんなこと言つたんだし、気にしなければいけないのは俺のほう、だよな。

「パパさん、コロナのさつきのお話覚えてるですか？」

「ウニヨーユってケガが治るんですって話？」

「否定。ウニヨーユじゃないのです。傷ついても、癒してくれる人がいればいいんだよ」

「ああ、それ

癒してくれる人って、言われてもねえ。

少なくとも、今日チビ助と会つたばかりの俺にそんな大役は務まらねーな。

だけ♂。まあ、なんだ。モヤモヤすんだよな。

癒す云々は正直ジンとこね口に、あこつこせわんと謝りなきやこけないな、ってこうモヤモヤ感。

ま。ウダウダ考えていても埒があかね口し。

立ち上がり、ぐこーっと伸びをしながら、

「うひ、あとほん分で乾かせるな?」

チビチビ助の頭をぽんぽんと呂いて、ドライヤーを渡す。

そしてドアの前に立ち、言つてみる。

「おーい、チビ助やーい。お前さんも早く髪乾かさなこと風邪ひこりまつや」

いなかつたりして。だとしたら恥ずかしい「コト」の上なのが。

「しゃ、しゃつかん。えつと、その、ボクね。あのあの……

お、いたいた。

おつなの瓶が闇に流れやすこやかに、瓶母をドアにぴりたつとくつ
付けて、

「あー。おつなの、わのねせーピメン、な」

「……えつ？」

「なんつーか、イヤなこと言つたまつて。黙黙は無かつたつてこと
か、ありや、コレこの詫か。

その とにかく「ピメン。わのねせわなー」

「ううん。違つもん、しゃつかやんが謝るいじなんて全然なこと。
ボクの方にそ急におかしくなつたやつて、だからしゃつかやんに
謝らなきや いけないって思つて……」

「じゃあ、おあこー」

「でも、」

「めんどくかーから、おあこー」

「う、うう。ありがと、しゃつかやん」

ドア越しに泣き声が闇に流れしていく。

ホント、泣き虫なヤツ……。

「あのやつ。髪、乾かしてやるよ。特別サービス、俺ナリ」
「いんだが。」

わざわざ口中美で実験したし」

聞いた途端、頬を風船のよつて膨らませた口ロナにじめんなボーズをとつた後、

「だからまあ、もう泣くのはやめとけ。笑うといいが。
お前さんはそつひのほひが、しつくつとくつつかまあ、な
んていうか、」

言いかけたといひで、急にドアがバッと開いた。

「しゃつわん！」

体を支えていたモンが無くなつた俺は一瞬倒れそうになるが、すぐさま支えられた。

といつよつも、抱きしめられたつたほひが「こは出しこのか。

「……な、なんだよ、ジャーマンスーパークリクスでもかます気がイ
？」

そんな俺の冗談に、

「こやはは。違うよーだ。チョークスリーパーだもん！」

ポヘッと首を絞められた。

全然痛くは無かったのだが、そっちがその気ならと、

「いっひつひ。やつたな、こんこやう。ジャイアントスイングすつぞー！」

「バリアするしー！」

「甘い甘い、俺の世界じゃあ投げ技はバリア貫通なんだぜー！」

「えーっ、そんなのずるー。今はこいつの世界だもん！」

「秘儀、チョーク抜けー！」

ゆりなの腕からすると抜け出し、

「やーて、覚悟じゆつてなモンで……」

そう振り返つて、俺は田を見開いた。

あれ、コヤツ。

「むー。じつはなつた、ひの靈鳴呼んじやねつかなあ」

よく覗ぬと意外に。

「しゃりやん？」

八・三一、一、二、六 | 一、七、六、一、八

「あ、ああ……。
こや。でこつかお前、ずりこや。プロレス、ひじで靈鳴呼んだり
反則負けだつつわ」

「あ、そつか。反則負けになつちつた。
「はははー、やつぱ、しゃりやんと一緒ここねと楽しこなあ」

風詠の無こ笑顔を向かぬゆつな。

俺は少し肩をすくめたあと、

「ん。やつぱみをつひの方がチビ助つぽい

と、つこボンヒヒ叫んでしまった。

「え、しゃつひを何か言つた?」

「なーんも。ほれ、それより髪乾かさねーの?」

「乾かすー! わーい! アイスウォーターちゃんわーい!」

バンザイして、何故か口口ナを抱き上げるやつな。

無表情のままブンブンとなすがままに振り回される口口美。

せつかく綺麗にセーフティしてやつた髪がボッサボサになつて……ト
ホホとこめかみを押された俺、といった構図だ。

やれやれ、しかしまあ。

ああ言つたはいいが。

ちと、ここつの場合、元氣があるのも問題かもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8741/>

魔法少女は俺がやるっ！

2011年9月14日22時18分発行